

---

# バイセクシュアル

桂 ヒナギク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バイセクシユアル

### 【Nコード】

N5412D

### 【作者名】

桂 ヒナギク

### 【あらすじ】

電車の中で見掛けた少年に恋した主人公はその少年に接触する事を試みるが……。毎日が波乱に満ちた同性愛(?)の物語。主人公の恋の行方は？

## Story 1・男になりました

私、澤田<sup>さわだ</sup> 有紀<sup>あり</sup>檸<sup>も</sup>は、学校に行く途中、電車の中で恋をした。相手は同じ学校で隣のクラスに居る黒田<sup>くろだ</sup> 新一。最初はただ見ているだけで良かった。でも、そうも行かなくなつた。

彼を向かい側の席に座つて眺めていると、途中から乗ってきた長髪でつり目の女と仲良くお喋りを始めたのだ。

ム力付いた私は、彼を手に入れる為、彼に接触する事を試みたのだが・・・。

キンコンカンコンとチャイムが鳴り、放課後を迎えた私は、階段の前で双子の弟、澤田<sup>さわだ</sup> 有紀<sup>あり</sup>雄<sup>ゆう</sup>と彼を待ち伏せしていた。

何故この面子なのかを簡単に説明すると、有紀雄が彼と大親友だからである。

「姉貴、出て来たぞ」

私は角に隠れて教室の方を見た。

その先には教室から出て来たばかりの彼の姿が在った。隣には今朝見た女が居る。

「おつ、夏奈子ちゃん、今日も可愛いなあ」

真田<sup>まんだ</sup> 夏奈子<sup>ななこ</sup>。有紀雄の情報によると、新一の彼女らしい。

私はスツと前に出て態と新一にぶつかろうとした。だがぶつかったのは、隣に居た彼女の方だった。その瞬間、私は凍りついた。

何故なら、ぶつかった拍子に私の唇と彼女の唇が重なっていたからだ。

「夏奈子、そっちだったのかお前？」

言って後退る新一。

「悪い、夏奈子。俺、もうお前と付き合えない」

新一は踵を返して駆け出した。

「え、一寸新一!？」

我に返った夏奈子は振り向いたが、既に新一はいなかった。

「ああ、もう!どうしてくれんのよ!？」

怒った夏奈子が私に向き直り、物凄い剣幕で睨む。

「スマン。まさかこうなるとは思ってもしなかった。許してくれ」

私はそう言って頭を下げた。

「はぁ」

夏奈子は溜め息を吐いた。

「顔上げて頂戴」

私は恐る恐る顔を上げた。

まじまじと見つめる夏奈子。

「あんた、意外と可愛いよね。決めた。あんた、私と付き合いなさい」

夏奈子はバイセクシュアルだった。

「否、私は黒田くんと・・・」

「あんなどうしようも無い奴どうだって良いのよ。だから私と付き合いなさい、ね?」

「助けて有紀雄」

私は振り向き様にそう言った。

すると有紀雄が顔を出して「ごめつくり」と手を振って去る。

「薄情者!」

「ねえ、返事聞かせてよ」

どうしたら良いんだ私は。

「ねえ、返事」

「ああっ、五月蠅<sup>うっせ</sup>えなもう!解ったよ、付き合えば良いんだろ、付き合えば!」

その時、私は後悔した。言っではいけない禁断の言葉を口にしてしまった事に。

「あら、別に男口調真似なくても良いのよ?」

「否、真似てる訳じゃなくて、元々がこう言う口調なんだ」

「ふうん。まあ良いわ。私、真田 夏奈子。宜しくね」

「澤田 有紀檸檬だ」

何自己紹介してんだ私は!?

「え、あんたが澤田 有紀檸檬?」

「知ってるの?」

「知ってるわよ。だってあんたちまた巷じゃ有名だもん。夜な夜な町を徘徊しては不良共に喧嘩を売ってボコボコにしている不良女子高生ってね」

「飽くまで噂だろ?」

「そうだけどね。所で、もう帰り?」

私は持っていた鞆を見せた。

「じゃあさ、これから何処か遊びに行こうよ。デートよ、デート」  
行かざるを得ないのか私は。

「別に構わないけど・・・」

他に選択肢が見付からなかった私はそう答えていた。

「じゃあ決まり。何処に行く?」

何処でも良い。勝手に決めてくれ。

「そうだ、商店街なんかどうお?あそこに新しい洋服屋が出来たら行ってみたいのよね」

「ああ、良いけど」

「じゃあ決まり。レッツゴー!」

言って夏奈子は私の手を掴んで歩き出した。

商店街に着くと、新しく出来たと言う洋服屋に私たちは入店した。  
「ねえねえ、これ可愛いと思わない?」

夏奈子が私にそう訊ねた。

手にして居るのは水玉柄のワンピース。

「着てみれば？似合うんじゃないか？」

「って、私は何を答えているのだろうか。」

「そうお？じゃあ試着してみるね」

言って試着室に入っていく夏奈子。

暫くして、着替え終えた夏奈子が試着室のカーテン開けた。

「有紀檸檬、どうお？」

「可愛いと思うぞ」

「本当？じゃあこれにしよう。有紀檸檬」

「私が払うのか？」

「当然でしょ。有紀檸檬は私の彼氏？否、彼女？どっちだ」

夏奈子の頭がショートした。今なら逃げられるだろうが、何故かそうしなかった。

「どっちでも良いけどさ、買ってやるから早く着替えろよ」

「うん」

夏奈子はカーテンをして制服に戻し、再びカーテンを開けた。

「次はあんたね」

「え、私も買うの？」

「そうよ。だから選んで来なさいよ」

「あ、ああ」

私はそう返事をする、男性用の服が有る所に移動して物色を始めた。

背中にドクロのマークが入った革ジャンにジーンズ、それと適当なＴシャツを選んで手に取る。

「それ、巷でよく不良が着てるよね」

いつの間にか側に居た夏奈子がそう言った。

「変か？」

夏奈子は首を横に振るって答える。

「有紀檸檬なら何着ても似合うよ。ほら」

と背中を押されて試着室に入れられる。

私はカーテンを閉めて着替えると、カーテンをオープンした。

「似合うよ、有紀寧」

「お世辞有り難う」

「お世辞じゃなくて率直な感想だよ」

私は試着室の鏡で確認した。格好良い。

「これ買おう」

気に入った私はそう口にしていた。

私はカーテンをすると、制服に戻してカーテンを開けた。

「次下着コーナーね」

「あ、ああ」

私はそう返事して夏奈子と共に下着コーナーへ移動した。

「あ、これ可愛い」

と夏奈子が手にしたのは、お尻にたれパンダの絵が描かれた女性用のパンツだった。

「欲しいのか？」

「なっ、そんな訳無いでしょ！」

夏奈子は頬を赤くしながら慌てて戻した。

「欲しいなら買ってやるが」

「要らないわよ！」

「あ、そ」

私は夏奈子が置いたパンツを手にした。

「へえ、あんたもそう言う所あるんだ？」

「否、私はスパッツ派だから」

「スパッツ？」

「あれ穿いてると動きやすいんだ」

言って私はスパッツを手を取った。

「ふうん。私はスパッツは穿かないなあ」

「どうでも良いけど、早く買おうぜ」

「一寸待って」

言って夏奈子はブラジャーのある所へ行ってそれを手にすると戻って来た。

「はい、これ。あんたの分」

と渡されたのは、白いブラジャーだった。

「私、未だノーブラなんだ」

「うーん、よく見たらあんた俎板ね」

グサツ！

心に矢が突き刺さった。

「ごめん、気にしてた？」

「否、そんな事無いけど」

と言つては100%嘘になる。

「・・・あんた、本当は男なんじゃない？じゃなかったら俎板って言われた時点で傷付くものね」

否、傷付いてます。ただそれを表に出さないだけだ。

「何言つてんだよ。私は正真正銘女だ」

言つて私は夏奈子の手の平を自分の股間に当てがった。

「なっ、何処触らせてんのよ！？」

夏奈子は頬を赤くした。

「同性なんだから良いだろ」

「それもそうね」

と納得して冷静になる夏奈子。懐柔に成功した様だ。

「それより早く買おうぜ」

「そうだったわね」

私たちはレジまで行き、会計を済ませる。勿論、払ったのは私だ。

「有紀檸檬」

と店から出て少し歩いた所で夏奈子が声を掛ける。

「何だ？」

「恋愛公園寄って行かない？」

恋愛公園か。あそこには確か、桜の木があつたな。その木の下でお互いが口付けを交わすと永遠に結ばれると言つ伝説がある公園。つて、待て。私は女だぞ。大丈夫なのか？

「ねえ、行こうよ」



「そうだな」

私たちは商店街を離れ、恋愛公園にやって来た。

「ねえ、知ってる？あの桜の木の下でキスすると永遠に結ばれるって噂」

そう言つて公園内にある大きな桜の木を指差す夏奈子。

「知ってるが、それがどうした？」

「試してみない？」

「えっ？」

私は目が点になった。

「同性がキスをしたらどうなるか試すのよ」

伝説が真実だとして、同性がキスしたらどうなるんだろうか。

「それ、興味あるな」

興味津々な私はそう答えた。

「じゃあやってみようよ」

言つて夏奈子は私の手を掴み、桜の木の下まで駆けた。

「本当にやるのか？」

「当然でしょ。私たち付き合つてんだから、キスぐらいしなくちゃね」

私はゴクリと唾を飲み込んだ。そしてゆっくり、夏奈子の唇に自分の唇を近付け、重ねた。

その瞬間、光りに包まれたのと同時に私の体に異変が起きた。

何と、股間から何かが生えてきたのだ。

私は慌てて接吻を止め、後ろを向いて股間に手を当てた。

生えていた。男にしか無い息子と言う奴が。

「どうしたの？」

私が体の異変に驚いていると、夏奈子が心配そうな顔で私を見つめてきた。

「有紀雄？」

え、有紀雄？有紀雄は私の弟だが。

「一寸待つて。私は有紀寧だ。恋人の名前間違えないで欲しいな」

「何言つてんのよ。あんた、頭大丈夫？」

「私は女で有紀樟と言う名だ。有紀雄じゃ男だろ」

そう言つと夏奈子に可哀想な者を見る目で見つめられた。

「あんた、何か悪い物でも食べた？そこにあるトイレで鏡見てきなさいよ」

私は辺りを見回し、男女共用の公衆トイレを見付けるとそこに駆け込んで鏡を覗いた。

鏡に写ったのは、有紀雄の姿だった。

どういう事だこれは？

私はトイレを飛び出して桜の木の下に戻り、荷物を手にすると入り口に向かって駆け出した。

「有紀雄！」

「悪い、確かめたい事があるんだ！」

そう言つて公園を出た後、私は自宅まで猛ダッシュした。

「ただいま！」

家に上がり、そう言う。

すると洗面所から「おかえり」と言う声が返ってきて全裸の女が姿を現した。

私だった。

「あ、姉貴・・・？」

「どうした？」

「服・・・着てくれないか？」

「何だ。お前、そんな事気にして顔赤くしてんのか。姉弟<sup>きょうだい</sup>なんだから気にする事無いぞ」

そつだ。私は家の中ではいつもこうだった。

「俺、男だぜ？全裸で居られると襲っちまうぞ」

「ああ、大丈夫だ。もし襲ってきたら問答無用で打つ殺すからな」  
そんな物騒事を言うのも私だ。

「所で、夏奈子ちゃんとのデートはどうだったんだ？」

「最悪だ」

「何か遭ったのか？」

「ああ。帰りに恋愛公園で伝説を確かめたんだ。そしたら女から男になっちまった」

何を言ってるんだ私は？夏奈子の記憶には私では無く有紀雄として刻まれていたんだ。目の前に居る私が信じる訳が無いのに。

「姉貴・・・なのか？」

目の前の私がそう訊ねた。

「お前、有紀雄か？」

「そうだけど。ついかなってんだよこれ？風呂に入ってたらいきなり姉貴の体になっちまったんだ。ま、それなりに楽しめたけどな」

「お前・・・私の体で弄んでんじゃねえよ！」

私は目の前の私に思いつ切り殴り掛かった。

しかし、目の前の私はひらりと身をかわした。

バカな。スピードには自信有ったのに。

「今の俺、姉貴だから動体視力と身体能力が有紀雄の時より飛躍的に上がってるんだ」

「絶対殴ってやる」

言って私は再び殴り掛かるが、またもや避けられて空振りに終わる。

「糞！」

私は癖で胸倉を掴もうとしたが、服が無かった。

「姉貴、これはこの前のおかえしな」

ガスン！

私は顔を思いつ切り殴られた。  
ショックで鼻血が垂れる。

「お前の体だぞこれ」

「関係無え」

ガスン！

再び殴られた。

「やめてくれ有紀雄」

「じゃあ謝ってくれないか？俺を殴った事」

「あれはお前が殴られる様な事するからだろ」

「不可抗力だろ」

ガスン！

殴られた。

「えいつ」

私は有紀雄の股間を蹴ってやった。

しまった。女は平気なんだ。と言う事は・・・。

私はこれから起こる事を想像して冷や汗を掻いた。

「そうだ。この際、姉貴にも男にしか味わえない苦痛つてもんを教えてやるよ」

言って有紀雄が私の股間を蹴った。

「うつ！」

私はあまりの痛みに呻き声を上げて股間を押さえた。

「痛い？俺がいつも姉貴にやられて味わってた痛みだ」

「お前、元に戻ったら覚えとけよ」

そう捨てゼリフを吐いて部屋に行こうとしたが、あまりにも痛くて動けなかった。

「この痛みは何時静まるんだ？」

「5分から10分くらい。長いと30分くらい痛みが残る」

「マジかよ・・・」

「姉貴が悪いんだからな」

「ごめんなさい、もうしません」

嘘だが。

「目が笑ってるぞ」

「・・・・・・・・」

返す言葉が見付からない。

「あ、そうだ。先刻、剛田って人から姉貴宛てに電話が来たぜ。何でも、今夜リベンジするとか何とかって言ってたけど、何の話し？」

「何て返事したんだ？」

「何だか分からないから取り敢えずOK出した」

「バカ。お前、それ喧嘩のリベンジだ」

「マジかよ。どうすりゃ良いんだ？」

「行つてこい。それで死ね」

「俺が死んだら姉貴、元に戻れないじゃん」

「それは嫌だ。けど受けてしまった以上、行かざるを得ない」

「解つたよ。行ってくる」

「ああ、気を付けろよ。それと服着とけ」

「服？ああ。それ着て良いか？」

「そう言つて指を差したのは、私が買ってきた服だった。」

「駄目だこれは」

「けどそれ、姉貴が着るんだろ？だったら俺が姉貴として着ても同じじゃないか」

「・・・しょうがねえな。勝手に着ろ」

「言つて私は階段を上つて行く。」

「痛みは大丈夫なのか？」

「ああ、もう落ち着いてる」

「そうか」

「有紀雄はそう言つて服を取り出した。」

「あ、一寸待った！」

「私は階段を駆け降りて袋の中から夏奈子が欲しがってたパンツを取り出した。」

「パンダ？」

「とよく改めて腹を押さえて笑い出す有紀雄。」

「お前勘違いしてるから教えとくけど、これは夏奈子にあげる物だ」

「あれ、姉貴が穿くんじゃねえの？」

「私はスパッツ派だ」

「ふうん。じゃあこれを穿けば良いんだな？」

「言つてスパッツを取り出す有紀雄。」

「つーか、何だこれ？男物じゃん。しかも巷で不良が着てる様なもんだぞ」

「お前もそう思うのか」

「夏奈子ちゃんにも言われたのか？」

私はコクリと頷いた。

「姉貴らしくて良いけどな」

「フオローになってないからな、お前」

「そうだな。それより姉貴、ブラは買ってねえの？」

「要らねえからな」

「確かに、姉貴は俎板だもんな」

グサッ！

心に二本目の矢が突き刺さった。

「悪い、気にしてたか？俎板」

グサッ！

また刺さった。

「お前、これ以上言うな」

「俎板をか？」

グサグサッ！

二本の矢が同時に刺さった。

「凄えな、俎板」

完全に落ち込んだ私はリビングに入って隅で小さくなった。

「どうせ私は俎板さ。幾ら栄養取っても出ないんだ」

「姉貴の場合、全部攻撃力に行くからな。じゃあ俺、もう行くな」

有紀雄はそう言って服を着ると家を出ていった。

それから一時間経った頃、有紀雄が帰ってきた。

私は直ぐ様玄関へ向かった。

そこにはボロボロになった私の姿が在った。

「なっ、どうしたんだよそれ！？」

「敗けた。まさか10人で来るとは思わなかった」

「お前、ヘタレな」

「そう言う姉貴は勝てるのかよ？」

「私は何十人掛かって来ようが返り打ちに出来る」

「凄え・・・な・・・」

その言葉を最後に、有紀雄は意識を失って倒れた。

私は有紀雄を抱えて自分の部屋に運び、ベッドに寝かせて有紀雄の部屋に移動した。

「散らかつてるな、有紀雄の部屋」

私は思わずそう口にした。

「掃除でもするかな」

掃除用具を用意して掃除を開始した。

「ん？」

掃除をしていると、ベッドの下にエロ本を発見した。

私はキョロキョロと辺りを見回してからエロ本に目を下ろした。  
パラパラとページを捲って一通り見る。

何だこれは。息子の様子が変だ。

「姉貴、勃<sup>た</sup>ったの？」

いつの間にか側に居た有紀雄がそう訊ねた。

「うわっ！」

私は慌ててエロ本をベッドの下に戻して有紀雄の方を向いた。

「そりゃまあ、健全な男の子の体だからな」

「あのさ、隠したんだから答えるのもどうかと思うぞ」

「てかお前、寝てた筈だろ。何でこんな所に」

「目が覚めたんだ。そしたら俺の部屋から『うおっ』とか『うはっ』

とか聞こえたから来てみたら姉貴が楽しそうにエロ本見てたんだ。

近付いて声掛けても気付かねえくらい集中してたぞ」

「マジかよ」

「中身が女でも男の本能には逆らえないか」

「みたいだな。つか、お前の部屋汚いからな」

「五月蠅えな。良いんだよ」

「否、良くない」

言って私は掃除を再開した。

そしてピカピカと光る程綺麗になった所で、掃除を終わらせた。

「うおー、マイルームがあ！」

「悪いが今は私の部屋だ」

「こうなったら姉貴の部屋を汚してやる！」

言って有紀雄は部屋を出て行った。

一人残された私は、掃除用具を片付け、ベッドの下からエロ本を取り出して閲覧再開。どうやら填ってしまったらしい。

「・・・・・・・・」

何か物足りない。今度、夏奈子に裸を見せて貰うか。

そう思うと私はエロ本を仕舞ってベッドに横になった。



## S t o r y 2 ・変態への道（前書き）

15禁なのでこれが限界なのですう。

## Story 2・変態への道

「姉貴、起きろ」

その声と共に体を揺さぶられた私は目を覚ました。  
そして最初に見たのは、私の姿だった。

「戻ってないのか」

「そう簡単に戻ったら苦労しねえよ。つか、早く起きて行こうぜ」  
「その前に飯だ」

「そんなの作ってる時間無えよ」

私は時計を見た。

時刻は8時45分。ヤバい時間である事は間違い無い。  
私は慌ててベッドから出て着替えを済ませた。

「有紀雄、モタモタしてねえで行くぞ」

靴を取り、部屋を出て階段を降りる。

靴を履き、ドアを開ける。

「有紀雄！」

叫ぶと支度を終えた有紀雄が降りてきた。

「お前、Yシャツは中に入れろ」

「嫌だよそんなの」

「格好悪いからな、お前」

「解ったよ」

言って渋々Yシャツをスカートの中に入れる有紀雄。

「これで良いか？」

「ああ。あと急げ」

有紀雄が靴を履き、外に出る。

私はドアを閉めて鍵を掛けた。

「ダッシュ！」

言って学校まで駆ける。

「ずるいぞ姉貴！」

有紀雄が慌てて後を追って来た。

「遅えな、姉貴」

「悪かったな」

「先行ってるな」

そう言つて一足先に駆けて行つた。

何かもう面倒だな。

私は走るのを辞めて歩き出した。

駅に着き、定期を出して改札を通り、ホームに出て電車を待つ。

「有紀雄」

と声が聞こえて右肩を叩かれた。

振り向くと夏奈子が居た。

「夏奈子、何で？」

「元カレに聞いたのよ」

ああ、そうか。こいつ、新一と付き合ってたんだっけ。あれは気の毒だったな。

「ごめんな。俺の所為で別れる事になって」

「何で謝るのよ？」

「え、だってほら。昨日、廊下で」

「ああ。あんたが飛び出してきて私にキスした時か。そんなの別に気にしてないからさ。それに、こうしてあいつなんかより格好良い彼氏ゲット出来たんだもん。感謝してるわ」

否、あれは新一を狙ってやっただけで、こいつとキスしたのは不可抗力だ。

「それより知ってる？ 新一の奴、もう新しい彼女作つたのよ」

「マジで？」

「うん。お相手は隣のクラスに居る不良だって。全く、あんなの何処が良いんだか」

私だった。

有紀雄の奴、私の体返せ。

「夏奈子、その不良、俺の姉貴だから」

「マジ？ごめん、知らなかった」

「良いよ、別に。事実だから。それより、放課後時間有るか？渡したい物があるんだけど」

「放課後に渡したい物。何だかドキドキするわ」

そんな話を話していると、電車がホームに進入してきた。

私たちは電車に乗り込み、座席に座った。

ドアが閉まって発車する。

「……………」

話題が見付からない。取り敢えず適当に話し掛けてみるか。

「あのさ」

二人同時に声を掛けた。

「夏奈子から言ってくれ」

「そう。じゃあ言うね。今日さ、私ん家に来ない？」

夏奈子からのいきなりのお誘い。これは行くべきだ。

「行って良いの？」

「うん。有紀雄に来て欲しいんだ」

「ああ、じゃあ遠慮無く」

「じゃあ学校終わったら真っ直ぐ家ね」

「うん。じゃあ放課後じゃなくて家行ってから渡すよ」

と言う訳で間の時間をすっ飛ばして夕方。

私は夏奈子の家の夏奈子の部屋に居た。

「で、渡したい物って？」

「ああ、これなんだけど」

そう言って包装紙に包まれた物を渡した。

これは昨日、私がたれパンダのパンツを自宅で包装した物だ。

「開けて良い？」

「ああ」

夏奈子は包装紙を綺麗に開けた。

「なっ！？」

刹那、夏奈子の頬が真っ赤になった。

「お前が昨日、服屋で欲しがってたパンツだ」  
「・・・バカ！」

夏奈子の投げたパンツが私の顔を覆う。  
私はパンツを退かした。

「要らないって言ったでしょ！？」

「え、でも思いつ切り欲しがってたじゃん」

「・・・あ、有り難う」

言って申し訳無さそうにパンツを取る夏奈子。

「だ、大事にするね」

「ああ」

「て言うか、彼氏に最初にプレゼントされた物がパンツってのもねえ」

「嫌なら返して来るが？」

「そんな事無いわよ」

言ってそのパンツをダンスに仕舞う夏奈子。

そうだ、忘れてた。

「夏奈子、はだ・・・」

やめところ。人間としてこれはどうかと思う。

「肌？」

「何でも無い」

「最後まで言いなさいよ」

「え、じゃあ言うよ。お前の裸を見せてくれ」  
ピシッ！

夏奈子のビンタが私の頬に放たれた。

「痛！」

「最っ低！」

「最低なもんか。健全な男の子なら普通の事だぞ」

「エロ本で済ませなさい！」

「エロ本じゃ物足りないんだ」

何を言ってるんだ私は。

「変態」

全くその通りだ。って、認めてるし。

「ま、まあ、そんなに见たいんなら、一寸だけなら见せても良いけど・・・」

マジで！？ラッキー！って、何考えてんだ私は！？

「良い？ホントに一寸だけだからね？」

そう言って服を脱ぎ始める夏奈子。

此奴、マジで見せる気だ。つか、やべえ。興奮して勃ってるし。ブレーキブレーキ。

「あのさ、やっぱ今度で良いよ」

私はそう言っただが、時既に遅し。夏奈子は全裸になっていた。

「もう脱いじやったわよ！」

「そう・・・みたいだね」

私は苦笑した。

「どうお？満足した？」

どうだろう。

「もう少し見せてくれ」

うわ、変態だ私。

「わ、解った。もう少し・・・否、有紀雄が納得行くまで・・・」

「マジ？だったら丸一日このままで居てくれ」

うわ、最低だ。下の下だ。

「そ、それは・・・否、彼氏の頼みだ。貫き通すわよ！」

変な所に火が点いてしまった。

ガチャ

ドアが開いて男の子が入ってきた。

「うわっ、姉ちゃん何やってんの？」

ドーンと効果音を鳴らして床に手を着く夏奈子。

「春樹、何も見なかった事にして出て行ってくれ・・・」

「もう見ちゃったよ」

「出て行け！」

「な、何か分かんないけど兄ちゃんもやるね。姉ちゃんを裸にするなんて」

「否、俺は何もしてないよ。此奴が勝手に脱いだんだ。パンツを買ってくれたお礼だと言って」

「うわぁ、姉ちゃんそう言う趣味有ったの？」

「消える。今直ぐ消える！」

夏奈子が立ち上がり、春樹を蹴って追い出し、ドアを閉めた。

その隙に私は夏奈子の洋服を隠した。全裸をじっくり堪能する為に。

「有紀雄、私の服何処へやったの？」

「知らねえな」

「無えならしょうがねえな。このまま居るしか無い」

「嫌よ！」

「無えならしょうがねえな。このまま居るしか無い」

私がそう言うと、夏奈子はペタンと座り込んだ。

「あんたは私を使って何がしたいのよ？」

「フラストレーションの解消」

「変態だ・・・」

「その変態の言う事を聞いて本当に裸になってる時点でお前も十分変態だからな」

「有紀雄、別れよう」

「ちよっ、お前本気で言ってるのか？自分から付き合ってくれって言っておいてそれは無いだろ」

「・・・・・・・・」

夏奈子は反論出来なかった。

「・・・悪かったよ。返す」

言って私は服を取り出して返した。

夏奈子は服を着ながら言う。

「やっぱあんたが隠してたのね」

「ああ。お前の裸をたっぷり堪能する為にな」

「変態だあ！」

面白かったので私は笑った。

「何が可笑しいのよ!？」

「否、何でも無いよ。じゃあ、俺はもう帰るね」

「え、帰っちゃうの？もう少し居てよ」

「裸になってくれるか？」

「帰れ」

「はいはい、帰りますよ」

言って私は鞆を持って夏奈子の家を跡にした。

それにしても夏奈子を弄るの楽しかったな。今度は何させよう。

この時、私は未だ気付いていなかった。自分が変態の道を歩みつつある事に。

T o b e c o n t i n u e d . . .



### S t o r y 3 ・男になりました・裏！（前書き）

これはS t o r y 1の裏側で起きていた出来事です。有紀雄視点  
になっていますので二度美味しい筈です。

### Story 3・男になりました・裏！

俺の名は澤田 有紀雄。今は訳有って姉の有紀檸の体になっている。

その俺に最近、彼女・・・では無く、彼氏が出来た。お相手は姉貴が惚れた黒田 新一だ。

ある日の放課後、夏奈子ちゃんと話しをする事に失敗した俺は、屋上へとやって来た。

すると、転落防止用のフェンスを越えた先の縁に、新一が立っていた。

「待て黒田！早まるな！」

俺は新一の下まで駆けた。

「黒田、何か遭ったんなら話してみろ」

「聞いてくれるのか？澤田」

「ああ」

俺が頷くと、新一はフェンスを越えた。

「実はな、夏奈子にレズの傾向が有ったんだ」

否、あれはバイだな。

「でさ、僕、振っちまったんだよ」

「それで何で自殺に繋がるんだ？」

「シヨックだったからに決まってるだろ！まあ、その事より、仲直りする方法解らないか？」

「多分無理だな。新しい恋人作れ」

ああ、俺が姉貴だったらなあ・・・。

「新しい恋人？」

「ああ、そうだ。まあ、取り敢えず今日の所は帰ろう。お前の新しい彼女作りは明日から始めような」

「ああ」

そうして一緒に帰る事にした。

「あれ？」

俺は学校から駅までの途中にある恋愛公園の桜の木の下で夏奈子ちゃんとキスをしている姉貴を見付けた。

「どうしたの？」

と新一が俺の顔見て視線を確認すると、姉貴たちの方を見た。

「やべえなあれ」

「見るな」

見たらまたショックを受けるだろうと思った俺は慌てて彼の顔を覆った。

やべ、こつち見た！

俺は新一の顔を覆ったままその場を去った。

そしてそのまま駅まで来てしまった。

「お前も早く帰れよ」

俺は新一を解放すると、そう言って駅構内へと入って行った。

自宅に帰った俺は、風呂に入っていた。

すると突然、俺の息子が中に引込み、髪の毛が背中まで伸びてくると言う有り得ない異変が起きた。

俺はシャワーを止め、ドアを開けて風呂から出て目の前にある洗面台の鏡を覗き込んだ。

そこに写っているのは、姉貴の姿だった。

「何で？」

俺は自分の体を改める。

どう見ても姉貴だった。

「ただいま！」

と俺の声が玄関から響いた。まさか。

俺は慌てて体を拭き、平然を装って「おかえり」と廊下に出た。

予想的中。玄関に突っ立っているのは、正しく俺だった。

「あ、姉貴・・・？」

此奴、中身は俺か。なら姉貴を装おう。

「どうした？」

目の前の俺は顔を真っ赤に染めながら答える。

「服・・・着てくれないか？」

「何だ。お前、そんな事気にして顔赤くしてんのか。姉弟なんだから気にする事無いぞ」

「俺、男だぜ？全裸で居られると襲っちゃうぞ」

「ああ、大丈夫だ。もし襲ってきたら問答無用で打つ殺すからな。所で、夏奈子ちゃんとのデートはどうだったんだ？」

「って、何訊いてんだよ俺！？此奴が姉貴と未だ決まった訳じゃねえじゃん！」

「最悪だ」

何が最悪なのか。

「何か遭ったのか？」

「ああ。帰りに恋愛公園で伝説を確かめたんだ。そしたら女から男になっちゃった」

此奴、姉貴か？

「姉貴・・・なのか？」

「お前、有紀雄か？」

「そうだけど。ついかなってんだよこれ？風呂に入ってたらいきなり姉貴の体になっちゃったんだ。ま、それなりに楽しめたけどな」

その瞬間、姉貴がキレた。

「お前・・・私の体で弄んでんじゃねえよ！」

姉貴がいきなり襲い掛かってきた。

俺はひらりと身をかわした。

「今の俺、姉貴だから動体視力と身体能力が有紀雄の時より飛躍的に上がってるんだ」

「絶対殴ってやる」

姉貴が再び殴り掛かってきた。

俺はひらりと身をかわす。

「糞！」

姉貴は俺の胸倉に手を伸ばしたが、服が無かった為に失敗に終わった。

「姉貴、これはこの前のお返しな」

言って俺は目の前に居る俺の姿をした姉貴の顔面を殴った。

ガスンツと言う音と共に鼻から血が垂れる。

「これお前の体だぞ」

「関係無え」

もう一発殴った。

ガスン！

「やめてくれ有紀雄」

「じゃあ謝ってくれないか？俺を殴った事」

「あれはお前が殴られる様な事をするからだろ」

「不可抗力だろ」

言って俺は三度目のパンチをお見舞いした。

「えいつ」

姉貴が俺の股間を蹴ってきた。

屹度今頃、蹴った事を後悔しているだろう。その証拠に大量の冷汗や汗。

「そうだ。この際、姉貴にも男にしか味わえない苦痛つてもんを教えてやるよ」

言って俺は仕返しに姉貴の股間を蹴ってやった。

「うっ！」

激痛に呻き声を上げて股間を押さえる姉貴。とても痛そうだ。

「痛いかな？俺がいつも姉貴にやられて味わってた痛みだ」

「お前、元に戻ったら覚えとけよ」

姉貴はそれを捨てゼリフにして去ろうとしたが、あまりにも痛く

て動けなかった。

「この痛みは何時静まるんだ？」

「5分から10分くらい。長いと30分くらい痛みが残る」

「マジ・・・？」

「姉貴が悪いんだからな」

「ごめんなさい、もうしません」

と姉貴は心を込めて謝るが、目だけは笑っていた。

「目が笑ってるぞ」

そう言つてやると、姉貴は言葉が詰まった。

「あ、そうだ」

俺は風呂に入る前に電話を受けていた事を思い出した。

「先刻、剛田つて人から姉貴宛てに電話が来たぜ。何でも、今夜リベンジするとか何とかつて言つてたけど、何の話し？」

「何て返事したんだ？」

「何だか分からないから取り敢えずOK出した」

「バカ。お前、それ喧嘩のリベンジだ」

「マジかよ。どうすりや良いんだ？」

「行つてこい。そんで死ね」

「俺が死んだら姉貴、元に戻れないじゃん」

「それは嫌だ。けど受けてしまった以上、行かざるを得ない」

「解つたよ。行つてくる」

「ああ、気を付けろよ。それと服着とけ」

「服？ああ。それ着て良いか？」

そう言つて俺は、姉貴が買つて来たと思われる洋服の入った紙袋を指差した。

「駄目だこれは」

「だけどそれ、姉貴が着るんだろ？だったら俺が姉貴として着ても同じじゃねえか」

「・・・しょうがねえな。勝手に着ろ」

言つて姉貴は階段を上つて行く。

「痛みは大丈夫なのか？」

「ああ、もう落ち着いてる」

「そうか」

そう言う俺は服を取り出した。

「あ、一寸待った！」

姉貴が慌てて降りてきて袋の中からお尻にたれパンダの絵が描かれたパンツを取り出した。

「パンダ？」

俺はそのパンツをよく改めると、腹を押さえて笑い出した。

「お前勘違いしてるから教えとくけど、これは夏奈子に上げる物だ」

「あれ、姉貴が穿くんじゃねえの？」

「私はスパッツ派だ」

「ふうん。じゃあこれを穿けば良いんだな？」

言って俺はスパッツを取り出した。

「つーか、何だこれ？男物じゃん。しかも巷で不良が着てる様なもんだぞ」

「お前もそう思うのか」

も、と言う事は。

「夏奈子ちゃんにも言われたのか？」

姉貴はコクリと頷いた。

「姉貴らしくて良いけどな」

「フオローになってないからな、お前」

「そうだな。それより姉貴、ブラは買ってねえの？」

「要らねえからな」

俺はチラッと胸を見た。

「確かに、姉貴は俎板だもんな」

その一言で姉貴はショックスクを受けた。

「悪い、気にしてたか？俎板」

またショックスクを受けた。

「お前、これ以上言うな」

「俎板をか？」

すると姉貴は更に傷付いた。恐らく、次言うとも完全に落ち込むだろう。

「凄えな、俎板」

その瞬間、姉貴は完全に落ち込み、リビングに入って隅の方で小さくなった。

「どうせ私は俎板さ。幾ら栄養取っても出ないんだ」

「姉貴の場合、全部攻撃力に行くからな」

もうやめところ。可哀想だ。

「じゃあ俺、もう行くな」

言って俺は服を着用し、家を出て待ち合わせの場所まで移動した。

「此処で良いんだよな？」

人気の無い河原に来ていた俺は辺りを見回した。

橋の下に黒い人影が10人程見えた。

「マジかよ・・・」

俺は思わず呟いた。

すると、黒い人影が一斉にこちらへやって来て攻撃を開始した。

出し抜けに攻撃を食らった俺は、あっという間にボロボロになり、

その場に倒れた。

「何だ此奴。本当に澤田か？」

「呆気なかったな」

「案外、替え玉だったりしてな」

「俺たちに勝てないと見込んで自分は逃げたってか。傑作だな」

そう言いながら、軍勢は去って行った。

直後、偶々散歩をしていた新一が偶々通り掛かり、偶然俺に気付いて俺の下にやって来た。

「君、大丈夫？」

大丈夫じゃない。



そう言いたかったが、喉から先に出せない。

「意識は有るみたいだね。立てる？」

俺は徐に起き上がろうとするが、途中で脱力してしまった。

新一は俺の下に手を入れると、俺の体を起こした。

「一体何が遭ったの？」

集団リンチ。

そう言おうと思ったが、やはり声が出なかった。

「まあ良いや。僕ん家来て。手当してあげる」

黒田、お前は良い奴だ。見直した。俺が女なら惚れてる所だ。つて、今女だった。

そんな事を考えていると、俺の心臓が高鳴りだした。

俺はこれが何なのか直ぐに解った。

どうやら、俺は此奴に惚れてしまったらしい。女として。

「乗って」

新一はそう言って、背中を俺に向ける。

俺は遠慮無くその背中にしがみついた。

「ふんっ」

新一はすつくと立ち上がる。

「重・・・」

今の、姉貴なら叩くだろうな。

ポカッ！

俺は無意識に新一の頭を叩いていた。

「いてっ！何か用？」

その問いに俺は笑みを浮かべた。

「????」

新一は頭にハテナを三つ浮かべて歩き出した。

「僕、黒田 新一って言っんだ。君は？」

「あー」

俺は発声が可能だと言う事を確認すると、姉貴の名前を言った。

「澤田 有紀檸」

「へえ、君があゝの澤田 有紀寧」

「知ってるの？」

「知ってるも何も、有名だからね。巷じゃ知らない人は居ないよ」

「何で有名なの？」

「噂になってるんだよ。夜な夜な町を徘徊して不良達に喧嘩売ってボコボコする伝説の不良女子高生って」

そんな伝説作るなよ、姉貴。

「着いたよ」

言つて新一が、表札に黒田と書かれた一軒家の前で止まった。

「ただいまー」

とドアを開けて中に入る新一。

すると奥から三十路を少し越えた感じの女性が出て来た。

「おか・・・って、その娘何！？」

「河原で倒れてるのを見付けたんだ。手当してあげてよ」

「わ、解ったわ」

言つて女性が新一から俺を受け取る。

「つて、この娘、澤田くんのお姉さんじゃないのよ！」

「え？」

「有紀寧ちゃんよね？」

その問いに俺は頷いた。

「あなた、また喧嘩でもしたの？」

俺は首を横に振り、集団リンチに遭つた事を女性に伝えた。

女性は顎めつ面になつて俺をリビングまで運び、食卓の椅子に座らせた。

「一寸待つててね」

そう言つと、女性は薬箱を取りに行った。

「あの、有紀雄くんのお姉さん」

「有紀寧で良いよ」

「じゃあ、有紀寧さん」

「あ？」

「有紀寧さんって、付き合ってる人とかって居ますか？」

「お前は初対面の女性にそんな事訊いてどうしたいんだ？」

俺は新一の問いにそう問い返した。

「初対面じゃいけないんですか？」

「否、別にそんな事言っただけでいいけど」

此奴、姉貴の容姿に惚れたな。

新一は安堵の溜め息を吐いて「良かった」と呟いた。

「あの、初対面の方にこんな事言うのも失礼だとは思ってますけど、僕の彼女になつてくれませんか？」

いきなりかよ！？普通友達とかからじゃねえ！？まあ、これは姉貴が望んでる事だし、OKしといてやるか。

「断る理由は無えな」

「そ、それじゃあ！」

俺は「ああ」と頷いた。

「何か盛り上がってるみたいね」

俺が新一との交際を受け入れた所で女性がやって来た。

「一寸沁みるかも知れないけど、我慢して頂戴ね」

そう言っただけ消毒液を俺の傷に吹き付ける。

「んっ！」

案の定、俺の怪我は沁みた。

女性は全ての傷をバンドエイドで塞ぎ、俺の膝を軽く叩いた。

「はい、お終い」

「あざーっす」

「良いのよ、このくらい」

そう言っただけ、女性は薬箱を片付けに行った。

「なあ、黒田」

「新一で」

「じゃあ新一」

「はい？」

俺は新一の後ろに手を回して抱き寄せ、自分の唇を彼の唇に重ね

た。

「んっ・・・ぷはっ！」

唇を離して新一の顔を見詰める。  
何やってるんだ、俺は。

「ファーストキス、頂きました」

ついでに何言ってるんだ、俺は。

新一は頬を赤くして固まった。

「じゃ、帰るな」

そう言っただけ俺は、覚束無い足取りで玄関まで行き、靴を履いて外に出た。

そしてドアをソツと閉めて自宅まで歩き出した。

自宅に着くと、俺は静に上がり込んだ。

すると、気配を感じたのか、姉貴が姿を現した。

「なっ、どうしたんだよそれ!？」

「敗けた。まさか10人で来るとは思わなかった」

「お前、ヘタレな」

「そう言う姉貴は勝てるのかよ？」

「私は何十人掛かって来ようが返り討ちに出来る」

「凄え・・・な・・・」

あれ？何か、意識が・・・。

気が付くと、俺は姉貴の部屋のベッドの上に横になっていた。

隣の部屋からは時折、「うはっ」とか「うほっ」とか妙な声が聞こえてくる。

気になった俺は、興味本位で隣の部屋に移動した。

すると、姉貴が楽しそうにエロ本を見ていた。しかも勃ってしまった様だ。

「姉貴、勃ったの？」

エロ本に熱中していた姉貴は、俺の声に「うわっ!」と驚いて慌

ててエロ本をベッドの下に隠した。

「そりやまあ、健全な男の子の体だからな」

「あのさ、隠したんだから答えるのもどうかと思うぞ」

「てかお前、寝てた筈だろ。何でこんな所に」

「目が覚めたんだ。そしたら俺の部屋から『うおっ』とか『うはっ』とか聞こえたから来てみたら姉貴が楽しそうにエロ本見てたんだ。近付いて声掛けても気付かねえぐらい集中してたぞ」

「マジかよ」

「中身が女でも男の本能には逆らえないか」

「みたいだな。つーか、お前の部屋汚いからな」

「五月蠅えな。良いんだよ」

「否、良くない」

そう言って姉貴は部屋の掃除を始めた。

見る見るうちにピカピカになっていく俺の部屋。

「うおー、マイルームがあ！」

「悪いが今は私の部屋だ」

「こうなったら姉貴の部屋を汚してやる！」

俺はそう捨てゼリフを吐いて姉貴の部屋に移動し、そのままベッドに突っ伏した。

## Story 4・日曜の危ないデート

日曜、午前8時。

空腹で目を覚ました私はベッドから出てカーテンを開けた。

空は雲一つ無い快晴。

飯食って夏奈子ん家に行って弄ぶか。

私は部屋を出て階段を降り、キッチンに移動して朝食のしたくを始めた。

「つて、何を作ろう？」

そこへ有紀雄がやって来てリクエストをする。

「俺、炒飯食いてえ」

「炒飯だな・・・つて、何で居るんだよ？」

「腹減ったからだよ」

「バカ。飯なんか食ってる暇あるか。お前は私なんだ」

「だから何だよ？」

「バイトに行け。日曜はバイトの日なんだ」

「え？」

「9時からだからな。今から走れば間に合うだろ」

「で、でも腹が・・・」

「食ってる暇なんか無いと言った筈だ。解ったらとっと行け」

「ちえ。で、何処だよ？」

「駅前の喫茶店だ」

「そうか。行ってくる」

言って有紀雄は出て行った。

「炒飯食おう」

私は有紀雄のリクエストした物を作り、食卓に運んで食べた。

ピンポン

半分くらい食べた所で家のチャイムが鳴った。

私は食事を中断して玄関に行ってドアを開けた。

その先に居たのは私の彼女だった。

「暇だから来ちゃった」

夏奈子は笑みを浮かべて家に取り込んだ。

「俺は未だ良いなんて言ってない。住居不法侵入罪で警察に連れてくぞ」

「そんな事したら殺すわよ？」

と睨み付ける夏奈子。

「冗談だ」

「そう。あら、良い匂いね。炒飯？」

「よく解ったな。大正解だ」

「誰が作ったの？」

「俺」

「え、あんたが！？あんた、ご飯作れたの！？」

「疑ってんの？何だっ作れるぞ」

「そう。じゃあさ、今度私ん家来て作ってよ。家でご飯作れるの春樹だけなのよね」

「親は？」

「早朝から仕事」

「良いじゃん。弟に作らせとけば」

「駄目よ。可哀想だもん」

言っ涙を零す夏奈子。何か事情があると見た。

「解った。作りに行く。所で飯は食ったのか？」

「未だ」

「何か食べるか？」

「良いわよ、別に」

言っ頬を赤くする夏奈子。しかし。  
グウ

夏奈子の腹の虫が鳴いた。

「・・・食べる」

「何が良い？」

「何でも良いわ」

そう言ってリビングに入る夏奈子。

「あ、これ食べて良い？」

夏奈子は私の食べ掛けの炒飯を見るとそう言った。

「それ俺の食べ掛けだぞ」

「知らないわよそんなの。食べて良いよね？」

私は暫し考えたが、結局折れる事にした。

「良いよ」

「有り難う」

そう言って椅子に座り、私の食べ掛けを口にする。

「美味しい。ホントにあんたが？」

「疑り深いな、お前」

「ホントにあんたが作ったんなら凄いわよ。あんた、調理実習の時  
ケーキを思いつ切り焦がしてたしね」

有紀雄だ。

「あ、あん時はどうかしてたんだよ、屹度」

「はーん？あんた、5回もやり直してたじゃない。あれで偶々だつ  
て言えるの？」

と夏奈子が可哀想な者を見る目で見た。

「あ、あれは態とだ。お前の気を惹く為の」

「あんた、バカじゃないの？」

墓穴を掘った私はドーンツと音を立てて両手を床に着いた。

確かに夏奈子の言う通りだ。あんな事で女子の目を惹く事なんて  
出来ない。

「まあ、ある意味引いたけどね」

「引かれちゃ意味無えよ」

「そうね。ご馳走様」

食べ終わった夏奈子がスプーンを置く。

ああ、私の炒飯が……。カムバック、私の炒飯！

「っーかさ、何しに来たんだ？」



私は立ち上がり様に訊いた。

「先刻言ったじゃない。暇だから来たって」

「じゃあさ、何処が行かねえか？休みの日に一日中ゴロゴロするってのもあれだろ」

「あんたがそうしたいなら付き合っても良いけど、何処へ行くの？」  
「・・・・・・」

何も考えてなかった。

「何も考えてないの？」

私は頷いた。

「じゃあ映画行かない？」

「映画？」

「私ね、見たい映画があるの。一緒に行こうよ？」

「ああ。良いけど」

「じゃあ決まり。仕度してきて頂戴」

「はいはい」

私は部屋に行き、デートに最適な服を選んで着替え、玄関に来た。

「遅い」

「しょうがねえだろ。服選んでたんだから」

「ふうん。まあ良いわ。行くわよ」

言って先に家を出て行く夏奈子。

私は靴を履いて家を出ると、ドアに鍵を掛けた。

「場所は何処なの？」

「駅前のシネマビル。そんな事より早く行こうよ」

そう言って私の手を掴んで歩き出す夏奈子。

駅前に来ると、夏奈子は迷う事無く目的の建物へと入って行く。

「あれを二枚お願いします」

夏奈子は窓口スタッフの後ろにある『こちらときめき高校』と言う物を指差した。

名前から察するに恋愛物だろう。

「一般の方でしょうか？二人で3、600円になります」

夏奈子は私の脇腹を小突きながら生徒手帳を出した。

私はポケットから生徒手帳を取り出す。

「失礼致しました。3,000円になります」

夏奈子がまた脇腹を小突く。私に払え、と言うのだろうか。

私は仕方なく財布を取り出し、中から千円札を三枚出して窓口に置いた。

「自由席になっておりますので、好きな席をお選び下さい」

言いながらお金をレジに仕舞い、チケット二枚と交換する。

私はそれを取り、一枚を夏奈子に渡した。

「上映まで一時間はあるわね。何処かでお茶でもしましょ？」

「そうだな」

私たちは一旦建物を出ると、向かい側の喫茶店に入った。

「いらっ・・・」

目の前の店員が固まった。そして汗をタラタラ流す。

その店員の正体は有紀雄だった。

「姉貴、何で固まんのだ？」

「え、この人が有紀雄のお姉さん？」

夏奈子は元私をまじまじと見詰める。

「意外と可愛い顔してるのね」

私はその言葉に赤くなってしまった。

褒められてるのは有紀雄なのに何故。

「っーか、この人固まってるわよ」

「ああ、それは多分俺たちと鉢合わせしたからだ。おい、固まってねえで働け」

私は目の前で固まってる有紀雄の胸を突いた。

「うわあっ！」

有紀雄が反射的に私を突き飛ばした。

その勢いで私は尻餅を着いた。

「痛！」

「有紀雄、大丈夫？」

「ああ、何とか」

「マスター！」

有紀雄が店長を呼ぶと、髭を生やしたハゲ頭が慌ててやって来た。出たな、クロちゃん。

「有紀檸檬くん、どうかしたのかな？」

「この方が私の胸をいきなり触ったんです！」

「脚色し過ぎだあ！お前が固まってたから我に返らせてやってただけじゃないか！」

「お客様、少しお話しを伺いましょうか」

言って店長が私を睨み付けた。嫌な予感がする。

店長は私の手を掴むと、Staff onlyと書かれた扉の向こうへ連れ込み、そしていきなり私を殴り付けた。ガスン！

私は勢いで倒れてしまった。

「何すんだこのハゲ頭！」

「は・・・ハゲ頭だとお！？」

神経を逆撫でされた店長が拳をポキポキ鳴らす。

「俺の一番気にしてる事を言いやがったな！？貴様は生かしちゃおけねえ！」

店長の拳が一気に降ろされる。

私は慌てて寝返りを打って間髪攻撃をかわした。

そこへ丁度、有紀雄がやって来た。

「グッドタイミング！お前、此奴を止めてくれ！」

「どうすれば良いんだよ？」

「やめて下さい店長、と後ろから抱き付くんだ。それで止まる」

「そんなキモイ事出来るか！」

「良いからやれ！私の命が懸かってんだ！」

「わ、解ったよ」

有紀雄は店長の背中に抱き付いた。

「やめて下さい店長！」

するとどうだろうか。店長は落ち着いて「はい」と甘えた声で返事をした。

私は立ち上がり、有紀雄の耳元で囁いた。

「（こいつ、私にベタ惚れなんだよ。だから私の言う事なら何でも聞いてくれるんだ）」

「（マジかよ!?!）」

「（ああ、マジだ。それと多少の事は我慢してやってくれ）」

「（多少の事?）」

「（胸触ったりケツ触ったりするセクハラ行為だ）」

その途端、有紀雄の顔が真っ赤になった。

「（姉貴は良いのかよそれで）」

「（言うなりになるんだから安いもんだろ）」

「（えっ、俺、先刻思いつ切り殴っちゃったよ）」

「（なっ!?! 拙いだろそれ! ハゲ頭の中の私の株が下がったらどうすんだ!?!）」

「（否、殴られて嬉しそうな顔してたぞ此奴）」

そうか。Mだったのか店長は。

「お前、此奴を死なない程度に殴つとけ。ストレス発散には良いだろう」

「良いのかよ!?!」

「だって此奴、Mなんだろ? 問題無しじゃん」

「ああ、適度にやるよ。つか、夏奈子ちゃんとデートか?」

「ま、まあな」

「頑張れよ」

言って有紀雄は出て行った。

「お前、有紀寧くんとはどう言う関係だ?」

二人つきりになった途端、ハゲ頭がそう訊いてきた。

「知りたいか? なら教えてやる。俺のコレだ」

言って私は拳を作って小指を突き立てて見せた。

「うおーっ、失恋したー!」

店長は豪快に泣き出した。本当に私に惚れてたんだな。可哀想に思えた私は本当の事を言ってやる事にした。

「悪い、今のは嘘だ。本当は姉弟だ」

「えっ、そうなの？」

泣き止んだ店長が目を丸くして私を見る。

「何だ。だったら最初からそう言ってくれば良いじゃないか」

ガハハ、と笑いながら私の背中を強く叩く。

「弁解する前にあんたが此処に連れ込んで攻撃してきたんだろうがよ。っーか、痛えぞハゲ！」

と最後にハゲを強調しておく。

「ハゲ？」

ヤバイと思った。離れよう。

「じゃあ俺、デート中なんで失礼します」

そう言って出て行こうとしたが、項を掴まれてしまった。

「一寸待て」

「な、何ですか？」

私は冷や汗を掻いた。

ガスツ、バキツ、ドカツ！

全てが終わり、私はボロボロの姿で倒れていた。

結局最後はこうなるのか・・・。

その後、何とか自力で夏奈子の下に戻り、一緒に映画を見た。

恋愛物では無くホラー映画だった。

放課後に主人公が好きな娘に告白しようと言った声は掛けたが、実はそれはゾンビで主人公に襲い掛かると言った内容だ。

凄く怖かった。

もう夏奈子と映画は見ない。そう心に決めた私だった。

## S t o r y 5 ・河原でデスマッチ メインは弟虐め（前書き）

この話は「S t o r y 3 ・男になりました・裏!」のリベンジ戦に繋がる話と弟を姉が精神的にも肉体的にも虐める話です。

## Story 5・河原でデスマッチ　メインは弟虐め

これから話すのは、私が未だ有紀雄になる前の事だ。

時期的には、高校に入った頃の話だ。

当時、私はかなり荒れていた。

夜の町を徘徊しては誰かれ構わず一方的に暴力を振るう。そんな毎日だった。

ある日の夜。

無性に腹が立っていた私は、ストレスを発散しようと、町を徘徊していた。

「おい！」

偶々土手を通り掛かった私は河原で数人の男が一人の男に対して暴行を加えているのを見掛けた。

私は近くまで駆け寄って言ってやった。

「てめえら、一人に対して大勢で掛かるとは卑怯じゃねえか。男なら一対一でやれ。それとも、大勢で掛からないと勝てないのか？ 雑魚だな」

「何だ、てめえは？」

「女か。女に用は無えんだ。あっち行つてな」

一人がシッシツと虫を払う様な動作をした。

それにムカついた私は、その男の懷に駆けて鳩尾に拳を埋めずめていた。

「うっ！」

男は呻き声を上げ気絶して倒れた。

「てめえ、よくもやりやがったな」

「ボーッと突っ立っていたからな」

「クソッ、舐めやがって！ おい、殺っちまっ」「あー、待った」

一人が言い掛けた所で私は手の平を前に出した。

「その前に救急車呼んで良いか？」

「ああ、そうした方が良いだろうな」

私は携帯を出すと、119番をした。

台数は倒れてる奴を含めて・・・10台だ。

「10台だとお！？巫座戯やがってえ！」

完全に舐めきられてると思ひ込んだ敵の一人が「打つ殺してやる！」と斬られ役の様なセリフを吐いて突っ込んできた。

私は相手の力量を測る為、態と攻撃を受ける。

ガスン！

男の渾身の力を込めた一撃が私の頬に決まる。

私は攻撃を受け流す為、態と倒れた。

「けっ、口だけかよ」

男は私がもう起き上がらないと思つて背中を見せた。

私は咄嗟に立ち上がつて男の背中に蹴りをくれてやる。

バキッ！

背骨が折れる音がした。

男はその場に倒れて悶えた。

「こんなものか。まとめて掛かつて来いよ」

言つて私は残りの八人を挑発した。

八人は見事挑発に乗り、襲い掛かつてきた。

私は目にも留まらぬ速さで迫り来る軍勢を一人、二人、三人と次々に倒していき、残り一人まで来た。

「てめえで最後だ！」

言つて私は拳を相手に当て・・・ようとしたが、既の所で留められ、天と地が引っくり返つた。

一瞬、何が起つたのか分からなかった。

気が付くと、私は倒れていた。

今のは・・・背負い投げ？

「悪いな。俺、柔道やってんだ。下手な真似すると怪我どころじゃ



済まないぜ」

「そうか。次からは気を付けよう」

私はこの体勢から空中に跳ね上がって立った。

「何だ、未だやるのか。辞めといた方が良くないんじゃないの？」

「それは私のプライドが許さないからな。悪いがお前は意地でも潰させて貰う」

「そうか。だったら俺も容赦しねえ」

言って男は構えながらステップを始めた。

「一応正当防衛にしたい。掛かってきてくれ」

「そんな事言って後悔しても知らねえからな！」

私はそう言って男に近付いた。

男が手を伸ばしてくる。

私はそれを擦り抜けて男の懷に辿り着いた。

「ふんっ」

私は男の鳩尾を殴って怯ませ、顎に膝蹴りを食らわせた。

しかし男は倒れず、蹠跟めくだけだった。

私はその隙に男を蹴って後方に跳んで離れ、後方宙返りして着地した。

「ふっ、今のは一寸痛かったぞ」

言って男は不気味に微笑んだ。

何なんだ此奴・・・強い。

「どうした、来ないのか？ならこっちから行くぞ」

男はそう言うのと駆けて私を殴り飛ばした。

「うわっ！」

私の体は宙を舞った。

目の前に男が現れる。

「あの世に逝っちまいな！」

男は私を斜めに叩き落とした。

「うっ！」

背中を地面に打ち付けられた私の体はバウンドして腹這いになっ

て止まった。

「くっ……！」

私は立ち上がるうとしたが、体に力が入らずに崩れてしまった。

「お前よ、俺の女にならないか？お前、容姿もそれなりにイケてるしな」

「それは有り難う。でもあんたの女になるのだけは勘弁だ」

「そうか、残念だな。俺の女になってくれれば助けてやったのによ」

「貴様の女になって助けて貰うぐらいなら死んだ方がマシだ」

私がそう言っていると、男が顔面を蹴り付けてきた。

「おぶっ！」

鼻血が垂れてくる。

「本当に殺すぜ、お前？」

何とかしなくては。

私は残された力を使って立ち上がる。

「何だ、立てるのか」

男はそう言っていると、後退して助走スペースを作って駆け手前で回転。遠心力を上乗せした強力なキックを私の腹に叩き込んだ。

「がはっ！」

私は吐血し、地面を数メートル転がるも、何とか立ち上がる。

「立つのが精一杯か？」

と顔面を殴り付けてくる男。

ガスン！

鈍い音と共に私は蹠跟めき、体勢を整えるのに失敗して倒れた。

勝算は無かった。それでも私は立ち上がり、チャンスを待つ。

「いい加減にしたらどうだ」

男が駆けてきた。

私はしゃがんで攻撃を避けた。

「何！？」

伸ばした男の拳が空を切る。

「ふんっ」

私は両手を地面に着けて両足で相手を蹴り上げた。  
バランスを崩した男の体が仰向けに倒れた。

私は直ぐ様立ち上がり、M字開脚で男の上に跨った。  
「どうやら私の勝ちのようだ」

そう言つて私は男の顔面を一発殴り付けようとしたが、既の所で止めた。

男が何か言おうとしている。

私はそれに耳を傾けた。

「お前、パンツ見えてる」

「だから？」

ガスン！

殴っていた。

「全然効いてねえからな」

言つて男は無理矢理起き上がろうとした。

フェアじゃないが、私は男の息子を殴り付けた。

「うおっ！」

男は激痛に悶えた。

頻りに息子を押さえる男。

「お前、卑怯だぞ」

「そんなの知るかぁ！」

ガスン！

私が男の顔面を思いつ切り殴り付けてやると、同時に男は白眼を剥いて気絶した。

「はぁ」

全てが終わわり、安堵の溜め息を吐くと、私は連絡先をこっそり男の懷に忍ばせる。

『リベンジしたければ何時でも相手してやる。好きな時に掛けてこい。番号は - だ』

「姉貴か？」

突然の声に私は驚いて顔を向けた。

顔を痣だらけにした弟の有紀雄が視界に映る。

「やっぱ姉貴か」

絡まれてたのは此奴だったのか。

「べ、別に助けたくて助けた訳じゃないからな。勘違いするんじゃないぞ」

そう言つて立ち上がり、去ろうとすると、私の体はフラフラと倒れてしまった。

「無理すんな。負ぶつてやるよ」

有紀雄が私の体を背中に乗せた。

「礼なんか言わねえからな」

「素直じゃないな、全く」

その言葉に私は「五月蠅<sup>うっせ</sup>えな」と言いながら微笑んだ。

その後、私たちはその場を離れ、自宅へと帰って行った。

自宅に着き、リビングで弟の手当を受けていた私は、弟にこう訊ねた。

「お前さ、何で絡まれてたんだ？」

弟はそれにこう答える。

「電車<sup>タバコ</sup>の中で煙草吸ってる奴が居たんだ。皆迷惑してたけど怖くて注意出来ないでいた。だから俺、そいつの顔を蹴り付けてやったんだ。そしたら顔覚えられてあの河原で絡まれたって訳」

「お前はバカか？電車<sup>タバコ</sup>の中で平気な顔して煙草吸ってる奴は裏にヤバイ連中が付いてるんだ。喧嘩にも勝てねえ奴がそんな事すんじゃないぞ」

「ああ。だから今度からは姉貴にちゃんと訊な」

「・・・私を面倒に巻き込むな」

だが弟は聴かぬ振りをして手当を続ける。

「っ！」

弟が塗った消毒液が頬の傷に染みる。

「悪い、染みたか？」

弟が心配そうな顔で訊ねた。

「心配してくれて有り難うな。大丈夫だ」

「姉貴、痛きや我慢しないで痛いつて言ってくれて構わないぞ」

「我慢なんか・・・してねえよ」

「あ、そ」

その時、ぐうぐうと二人の腹の虫が鳴る。

そう言えば、晩飯を食っていなかった。当然それは、有紀雄も同じだ。

「何か作るか」

「俺、炒飯食いてえ。姉貴の作る炒飯って美味えからさ」

「そうか。そう言ってくれると嬉しい。お礼に褒美をくれてやろう」  
言って私は弟の唇を奪った。その時間はほんの僅か。

「ちよつ、姉貴？」

「どうした？」

「いや、あのさ、キスつてのは、好きな相手とやるもんなんじゃないのか？」

「私はお前が好きだぞ」

「姉貴・・・」

「弟としてな」

途端、ズザッと引っくり返って滑る弟、有紀雄。

「どうした、有紀雄。女の子にキスして貰えたのがそんなに嬉しかったのか？」

私は立ち上がった有紀雄に近付いてしゃがんだ。

「なんなら大サービスだ。もう一度キスしてやろう」

私は再び自分の唇を有紀雄のそれに近付けて重ねた。

「んー！」

口を塞がれた弟は鼻で必死に何かを訴える。

私は一旦、唇を離してこう言う。

「そうか、ディープキスをして欲しいのか。ならしてやろう」

私は三度唇を弟のそれに近付けて重ね、舌を口の中に挿入した。  
ガブツ！

弟が私の舌を思いつ切り噛んだ。

ガスン！

私は弟の頬を殴って怯ませた隙に顔を離した。

「何すんだてめえ！？」

胸倉を掴んで睨んでやる。

「私はてめえがして欲しいって言うからしてやったんだぞ！？」

「否、言ってねえから。と言うかそもそも姉貴が勘違いしたんじゃないか。俺はな・・・っ！」

有紀雄が言い掛けた所で、私は立ち上がって彼の腹に膝蹴りをお見舞いした。

「うつ！」

呻き声を上げる有紀雄。

「御託なんか訊いてねえんだよ。お前、舌噛んだから飯抜きな」

「え、それだけは！」

「五月蠅い！」

私は有紀雄の体を前方に放り投げた。

ドガツ！

弟は壁にぶつかってズルズルと落ちて床に横になった。

「死ぬわ！」

弟が立ち上がって身の毛がよだつ程悍ましい顔で言った。

「その顔怖いからな、お前」

「誰の所為だよ！？」

「お前の自業自得」

「マジで言ってるんすか、それ？」

と今度は引き攣り笑いの有紀雄。

「お前は自分が悪いとは思っていないのか？言っとくが舌を噛んだのは100%お前が悪いぞ」

「否、俺は全然悪くないよ！姉貴がキスしてきたのがいけないんだ

よ！」

「何だ。キスして欲しかったんじゃないのか」

「あのな、俺は姉弟<sup>しい</sup>でキスなんかしようとは思わないし、実姉<sup>じっし</sup>にキスされたって嬉しくも何ともない」

「そうか・・・それはショックだ・・・。だから飯は抜きだ」

「何でだよ!?」

ガスン！

五月蠅いから殴ってやった。

「俺何もしないツスよね!?」

「知るか」

私は足払いで弟の体を倒し、腹をグイグイ足で踏み付けた。

「姉貴、痛いからやめてくれ」

「男なら我慢な」

「そう言う問題じゃないでしょ!」

どくしっ!

五月蠅いから脇腹を思いつ切り蹴った。

「うっ!」

弟は呻き声を上げて静かになった。

私は救急箱を片付けてキッチンに移動し、二人分の炒飯を作って一つはサララップをしてテーブルに置き、もう一つは自分の胃袋に詰め込んだ。

飯抜き宣言をしておきながら結局二人分作っている私。言ってる事とやってる事が矛盾していた。

「有紀雄、何時まで寝てんだ?」

私が声を掛けると、有紀雄が目を覚まして起き上がった。

「あ、炒飯出来たの?」

有紀雄が私を見ながら訊ねる。

「ああ。お前の為に愛情をたっぷり込めて作ったから美味<sup>びみ</sup>だぞ」  
「姉弟愛って奴?」

弟が椅子に座ってスプーンを取る。

「あのさ、何でラップしてあるの？」

「埃被らない様に」

「あ、そ」

弟はラップを外して「頂きます」と食べ始めた。

「どうだ、美味しいか？」

「うん、最高に美味しい」

「そうか、それは良かった。何と言っても最高級の毒を盛ったからな。美味しい筈だ」

「ぶぶーーーーーっ！」

有紀雄が驚いて吹き出した炒飯の米粒が私の顔に掛かる。

「汚いぞ」

「毒って何だよ、毒って！？しかも最高級の毒！？一体どんな毒なんだよ！？っーか死ぬから！」

私は一人で騒ぐ弟を可哀想な者を見る目で見詰めてこう言った。

「お前は冗談も通じないのか？」

そう言いながら私は顔に付着した米粒を掻き集めて口に詰めて飲み込んだ。

弟の唾液ごと飲み込んでしまった。

「姉貴の冗談はマジに聞こえるんだよ！」

「……………」

返す言葉が見付からなかった。

「っーか、俺が吹き出した物食べるなよ」

「捨てるの勿体ないから食べたんだが、駄目なのか？」

「姉貴は俺の唾液平気なのか？」

「それぐらいどうって事無いが」

「俺は嫌だな、他人の唾液が付いた物は」

「私の唾液入りな、それ」

言って私は改めて食べ始めた有紀雄の炒飯を指差した。

「ぶぶーーーーーっ！」

有紀雄がまた炒飯を吹き出し、米粒が私の顔に掛かった。



「汚いからな、有紀雄」

「人の飯に唾液入れんなよ、汚えだろう!？」

私は再び有紀雄を可哀想な者を見る目で見詰めた。

「お前は冗談も通じないのか？」

そう言いながら私は顔に付着した米粒を掻き集めて口に詰めて飲み込んだ。

弟の唾液ごと飲み込んでしまった。

「また冗談かよ!??てか姉貴の冗談はマジに聞こえるんだよ!」

「・・・・・・・・」

返す言葉が見付からない。

「やめた。アホらし」

そう言いながら私は立ち上がり、弟の「あんた俺を虐めてたのか?」と言う問いを黙殺して自室に移動し、寝間着に着替えてベッドに横になった。

## Story 6 ゲロ飲み少女（前書き）

注：貰いゲロを起こす可能性がありますので苦手な方は充分お気を付け下さい。また、吐いても当方では責任は負いませんので予めご了承ください。

## Story 6 ギョ飲み少女

土曜日。

学校が半日で終わると、私の席に少女が二人やって来た。一人は円らな瞳と髪型以外、夏奈子とそっくりな子で、もう一人は真田<sup>さ</sup>夏奈子<sup>な</sup>だ。

「有紀雄、紹介するわね」

そう言ってそっくりさんを差す夏奈子。

そっくりさんは「真田<sup>さなだ</sup> 夏奈絵です」と名乗り、頭を下げた。

「双子の妹よ。この娘、一寸事情が有って転校してきたの」

「え、夏奈子に妹居たの？」

「居たわよ」

「でもこの前は会わなかったよな？」

「この娘、帰国子女<sup>きこくしじょ</sup>なのよ。一昨日まで亜米利加<sup>アメリカ</sup>に居て、昨日帰ってきたの」

「へえ、そうなんだ。で、今日は挨拶って訳？」

「そう言う事」

「あの、宜しくお願いします」

言って夏奈絵は私にキスした。

「なっ！？一寸、夏奈絵！」

夏奈子が夏奈絵を引き離す。

「・・・・・・」

私は言葉が思い浮かばず、夏奈絵を見つめた。

「ごめんね。この娘、亜米利加暮らし長いから」

「柔らかい」

「夏奈絵！」

夏奈子が夏奈絵の耳を引っ張り口元に寄せて囁いた。

「（あんた巫座戯てんの！？有紀雄は私の彼氏なの！？有紀雄の彼女でもないあんたが勝手にキスしないで！）」

「夏奈子、そんなに怒るなって。此奴だって悪気が有ってやった訳じゃねえんだからよ」

「・・・有紀雄がそう言うんなら、許してあげるけど・・・」

と夏奈子は夏奈絵の耳を放した。

「んじゃ、帰るか。夏奈子」

私がそう言うと、夏奈子が可哀想な者を見る目で見詰めてきた。

「はぁ・・・可哀想に。あんたって、自己紹介も出来ないの？」

「澤田 有紀雄だ」

「見た目は格好良いけど中身はただの変態よ」

私が名乗ると夏奈子が要らぬ事を言いやがった。

「夏奈子ちゃん、それは違」「キモイ」

私が言い終える直前に夏奈子が言った。

「何が？」

「ちゃん付けが」

私は辺りを見回して三人以外に誰かが残っている事を確認すると大声でこう言った。

「皆、聞いてくれ！このクラスに居る真田 夏奈子って、バイなんだってよ！」

すると夏奈子の中でブチッと何かが切れた。堪忍袋の緒か、疑問符。

「あーんーたーねー！」

夏奈子が私を睨む。

「一寸来なさい！」

私は夏奈子に腕を掴まれて廊下に連れ出された。

「今ので私が同性もありだって勘違いされたらどうするのよ!？」  
私は教室の方に耳を傾けた。

「真田がバイ？マジかよ」

「バイって何？」

「ああ、バイってのは、男でも女でもどっちでもありって意味だよ」  
既に話題になっていた。

「有紀雄！」

「事実だろ？」

「今すぐ取り消さないと死ぬまでこれで殴るわよ！？」

言って取り出したのは釘を打つトンカチだった。

夏奈子が恐ろしくなった私は「取り消してきます！」と慌てて教室に入って皆に嘘だと伝えた。

帰り仕度をして校舎を跡にした私たち三人は、校門の前を歩いて  
いた。

右に夏奈子、左に夏奈絵。両手に花とはこの事か。

「モテモテねえ」

唐突に夏奈子が言った。

「何が」

「あんたよ、あ・ん・た。女の子二人に挟まれて歩くなんてあまり  
無いでしょ？」

「小学校ん時はしよっちゅうだったけど」

とは言っても、男二人だが。

「・・・・・・・・」

夏奈子が珍しそうな物を見る感じで見詰めた。

「何だよその顔？」

「あんたがねえ・・・」

「????」

「ま、確かにイケメンだし、有り得るかも。でも性格がねえ・・・」

「何が言いたいんだ？」

「何でも無い。それより何か食べて行こうよ。駅前の美味しいお店  
知ってるからさ」

「良いよ。真田は？」

と夏奈絵に振る。

「え、あ、あたしは、その、二人の邪魔になるし・・・」

「何遠慮してんのよ」

「え、良いの？」

「良いに決まってるじゃない。ね？」

と私に振る夏奈子。

「あ、ああ、勿論だ」

人数は多い方が楽しいからな。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

こうして三人は、夏奈子が知ってると言う駅前のお店に行く事になった。

「あそこよ」

駅前に来ると、夏奈子が古臭そうなそば屋を指差した。

「・・・・・・」

私と夏奈絵は言葉を失った。

「どうしたの？」

「否、随分と古いなと思って」

「何か今にも崩れそうだね」

「関係無いでしょそんなの。要は美味しければ良いのよ、美味しければ」

「そもそも美味しいのか？」

「私の舌に狂いは無いわよ」

夏奈子はそう言うと一緒に先にその店に入って行った。

正直こんな所で食いたくない。

私は夏奈絵の手を掴むと、駅まで駆けていた。

「え、え？お蕎麦は？」

「あんな所で食えるか。構わず走れ。夏奈子が出て来る前に」

私は時折後ろを顧みながら走り続ける。

「お姉ちゃん怒るんじゃないかな？」

「あいつが怒っても怖くねえ」

そう言い切って私は定期を出して改札を抜けた。

夏奈絵も定期を出して続く。

「間もなく、2番線に電車が」

と電車進入のアナウンス。

私たちは2番線ホームに向かい、丁度停車してドアを開いた電車に乗り込んだ。

ドアが閉まり、電車が発車する。

「どうしたかな、あいつ？」

「有紀雄？」

背後から声がした。

私は恐る恐る後ろを見た。

そこには、何かを企んでいる様な笑みを浮かべた夏奈子が立っていた。

「お姉ちゃん、何時から居たの？」

と訊ねる夏奈絵。

「ずっと居たわよ。有紀雄、降りたら覚えておきなさいね」

「降りねえ」

「あんた、何処まで行くつもり？」

「何処でも良いだろ」

「良くないわよ。あんた、自分が何したか解ってるの？折角お店を教えてあげたのに逃げたのよ？それなりの覚悟って物はあるんじゃないの？」

「何だ、覚悟って？」

電車が止まり、ドアが開いた。

夏奈子は咄嗟に私の手を掴んで電車を降りた。

妹もそれに続く。

「俺、もう一駅先なんだけど」

と言ってる間にドアが閉まり発車してしまう。

「なっ、行っちゃったじゃねえか！」

「知らないわよ。そんな事より、今から家に来なさい」

「はあ？何で」

「良いから来なさい」

その言葉に私は少し考えて行く事にした。

「解ったよ。行けば良いんだろ？」

言って私は三人で真田家へ向かった。

「で、お前の言う覚悟ってのはこれか？」

私は夏奈子ん家のキッチンに立ちながら、横に居る当人に訊ねた。

「誰の所為でお昼食べ損ねたと思ってる訳？あんたの所為よ、あ・ん・た・の」

「・・・リクエストは？」

「え？」

「リクエストだよ。何が食いたいんだ？」

「そうね・・・」

夏奈子は考え込んだ。

「うん、この間あんたの家で食べた炒飯で良いわ」

「よし、解った。下がってろ」

「何だよ？」

「味を盗まletakないから」

「あ、そ」

夏奈子はキッチンを跡にした。

私はキッチンを適当に漁り、材料を見付けると料理を始めた。

そして作業から僅か30分。三人分の炒飯が完成した。

「夏奈子、炒飯出来たぞ！」

そう言うと、夏奈子が夏奈絵と一緒にやってきた。

私は夏奈子と夏奈絵にお皿に盛った炒飯を渡した。

二人は食卓に着いて「頂きます」と炒飯を口に運んだ。

「美味しいか？」

そう訊ねながら、私も炒飯を持って食卓に着き、食べ始めた。



「お、美味しいです」

と夏奈絵。夏奈子はとうだろう。

「うーん、この前のと比べると余り美味しくないわね」

その言葉、癢に障った。あのネタやってやるか。

「そうか。最高級の猛毒エキスを使ったのに美味しくないか」

「ぶぶーーーっ！」

夏奈絵が突然吹き出した。あれ？

「あんたバカじゃないの？家に毒なんかある訳無いでしょ。それと

夏奈絵、今のは有紀雄の悪い冗談だから気にしちゃ駄目よ」

ちっ、有紀雄ん時みたいに行かないか。だったら・・・。

「持参した猛毒エキスなんだ」

「・・・・・・」

二人が口を閉ざして可哀想な者を見る目で見詰めてきた。

「（バカって言ってやりなさい）」

と夏奈子が夏奈絵に耳打ちをする。

「あの、お姉ちゃんがバカって言ってます」

「夏奈絵！」

「夏奈子、冗談を間に受けないお前の方がバカだからな」

そう言つと、ぐちゃっと私の顔に炒飯が半分程残っているお皿が被せられた。

「ごめーん、手が滑っちゃった。大丈夫？」

私は皿を退かしてテーブルの上に置くと、顔に付着した米粒を掻き集めて口に詰めて飲み込んだ。

「お前な、人が作った食べ物を粗末にするな」

「大丈夫よ。被せたのはあんたのだから」

「何！？」

私は自分の皿を見た。確かに、顔が埋まった跡がある

「夏奈子、お前飯抜きな」

私は自分の飯を平らげ、夏奈子のを取りあげた。

「何すんのよ！？人が折角食べてんのに！」

「知るか。飯を粗末に扱う奴には飯なんかあげねえ」

私はそう言って夏奈子の分も平らげた。

「私の炒飯よ!？」

夏奈子が椅子の上に立ち、テーブル越えて襲ってきた。

「うわっ!」

椅子から投げ出された私は、床に落ちて夏奈子の下敷になった。

「お、落ち着け夏奈子!」

「五月蠅いわね!今すぐ吐き出しなさい!」

無茶な注文だ。

やってやれない事は無いが・・・否、やっぱり無理だ。夏奈子に私の胃液ごと食わせるなんて無理!

「ほら、早く吐きなさいよ!」

「お、お前は吐いた物をどうするんだ?」

「食べるに決まってるでしょ!？」

その時、夏奈絵が引いたのは言うまでも無い。

「お前、俺の胃液ごと食う気か?」

「それがどうしたって言うのよ!？」

「胃液だぞ、気持悪くねえか?」

「あんたのなら平気よ」

「・・・・・・」

私は夏奈子の言葉に引き攣った。

「何よその顔!？」

「い、今、私の中のお前の株が下がった」

「下げるな、上げる!」

「解った、解ったから少し落ち着け、な?」

「私の炒飯返してくれたらね!」

言って夏奈子はプイツと横を向いた。

食って気が済むならそうさせてやるか。

「夏奈子、俺の腹を思いつ切り叩け」

「思いつ切り?」

「ああ、そうだ」

ガスンッ！

夏奈子の強力なパンチが腹に食い込んだ。

「うっっ！」

何かが私の胃から食道へ上がってきて、口内に溜まる。

傍らで顔を真っ青にして佇んでいる妹が確認出来る。

私は夏奈子の顔をこちらに向けて唇を近付ける。

夏奈子は抵抗もせず、口と口を合わせた。

私は夏奈子の口内に炒飯ゲロを送り込んだ。

ゴクゴクとそれを飲む夏奈子。とても気持ち悪い奴だと思った。

「ぶはっ」

飲み終わった夏奈子が唇を離れた。

「ご馳走様、美味しかったわ」

此奴、イカレてる。

「気持ち、悪く、ないか？」

「平気よ、あんたのだから」

マジで引くわ此奴。

## Story 7・女はキレると殺人マシンになる（前書き）

女はキレると何をするか解らない第7話。

「女がキレると平気で人殺すって本当ですか？  
んな訳ありませんよね・・・」

## Story 7・女はキレると殺人マシンになる

2月14日、バレンタインデー。

今日は女の子が好きな男の子にチョコレートをプレゼントする特別な日である。

私はその前日、チョコレートを作ろうと買ってきた力カオを発酵させる為水に浸けておいた。

それを今、水から出して力カオ豆を取り出して焙煎している所である。

そこへ有紀雄がやって来て訊ねる。

「姉貴、何やってんの？」

「力カオからチョコレートを作ろうとしているんだ」

「マジかよ。て言うか出来てるの買ってきて溶かせば良いじゃん」

「それだと手作りの意味が無くなるだろ。そもそも手作りと言うのは一から作るものだ。途中まで出来てるのを買ってきたのでは手作りとは言えない」

「ふうん。で、誰にあげるんだ？」

「決まってるだろ。夏奈子だ」

私がそう答えると、有紀雄が「プツ」と吹き出した。

「今笑ったな」

「だってよ姉貴、バレンタインデーって女が男にプレゼントする日だろ？今の姉貴は男だ。される側がしてどうするんだよ？」

「それもそうだな。よし、それじゃあお前が彼にあげろ」

「え、俺が？」

「当然だ。今のお前は女で私が惚れた男と付き合っている。あげなきゃ拙い<sup>ます</sup>だろ」

「断る」

「そうか、それじゃ仕方ない。やはり夏奈子にあげよう」

そう言いながら私は焙煎が終わった力カオ豆を、皮と胚芽<sup>はいが</sup>を除き、

磨り潰して固形状に固めた。

その後、出来上がったカカオマスを溶かし、お砂糖を加えハート形に型を取って固め、I LOVE YOUとピンクの文字を書く。  
「甘そうだな。味見していいか？」

私は有紀雄の言葉を黙殺して完成したチョココレートを箱に詰めて包装した。

「んじゃ、一寸行ってくるから留守番頼むな」

そう言っ私は夏奈子の所に行く為チョココレートを持って家を出た。

「あ」

出た所で私は足を止めた。

門の向こうに夏奈子が立っている。

「あら、私が来た事よく分かったわね」

「偶然だよ。俺も今、お前ん家行こうと思ってた所だし。つか、何の用だ？」

そう問いながら門を開けて夏奈子の中に入れてやる。

「有紀雄、今日は何の日？」

「バレンタインデー」

「そう。だから、チョココレートを持って来てあげたわ」

「有り難う」

私は夏奈子のチョココレートを受け取った。

「それはそうと、俺もお前の為に心を込めてカカオからチョココレートを作ったんだ。良かったら食べてくれないか？」

そう言っ私は夏奈子に出来たてのチョココレートを渡した。

「有り難う。て言うか、バレンタインデーよね？」

「そうだけど？」

「女の子が好きな男の子にチョココレートをあげる日よね？」

「だから？」

「あんた、男よね」

夏奈子が可哀想な者を見る様な目で見詰める。

「何だよその目、何が言いたいんだ？」

「別に。何でもないわ」

「あ、そ。まあ良いや。折角来たんだし上がってけよ」

「そうね、そうさせて貰うわ。って言いたいけどこれからバイトなのよね」

「そうか。それは残念だ」

「うん、残念だね。変態行為が出来なくて」

「変態言うな！」

「別に良いじゃない、本当の事なんだから。それとも何？変態から足を洗ってまともな人間になったって言うの？」

「端から変態じゃねえし」

「あ、そ。まあ良いわ。それじゃ私、もう行くね」

そう言ってバイトに行こうとした夏奈子を、私は腕を掴んで引き留めた。

「何？」

と夏奈子は疑問の表情で振り向いた。

私はその彼女を家の中に連れ込んだ。

「ちよっ、何なのよ！？」

「バイトなんか行くな」

その言葉に夏奈子は「はあ！？」と素っ頓狂な声を上げる？

「何で行っちゃいけないのよ？」

「お前と一緒に居られる時間が減るから」

その言葉に夏奈子は頬を赤く染めた。

「あ、あんたそんなに、私の事を必要として……。解ったわ、行かない。今日はあんたと居る」

「良いのか？」

「良いのよ、別に。あんなバイト辞めようとしてたし」

「あんなバイト？お前、今すぐバイト行け」

「何だよ！？」

「バイトの内容が気になってな」

「気になるな！」

「恥ずかしいバイトなのか？」

「そ、そんな訳無いでしょ!？」

「そうか。じゃあ行け」

「だから何でそうなるのよ!？」

「恥ずかしいバイトなのか？」

「.....」

私の二度目の問いに夏奈子は言葉を失った。

凶星らしい。

「夏奈子、行かないと遅刻するぞ」

「.....」

「夏奈子？」

応答無し。

「夏奈子？」

無反応。

「おーい」

目の前で手を振ってみる。

「ああつ、五月蠅<sup>うるさ</sup>いわね！行けば良いんでしょ、行けば！」

夏奈子は私に怒鳴りつけると、バイト先へ向かった。

私は少し間を開けてその後を追う。

そして辿り着いた先は、秋葉原のメイド喫茶だった。

お金、あるよな？

私は財布を取り出し、余裕がある事を確認すると店内に入った。

「お帰りなさいませ、ご主っ」

と言い掛けて固まるメイド服の少女。

「何であんたが来るのよ!？」

メイド服の少女は私を睨み付けた。

「いやあ、暇だったからね。それに、お前のバイトしてる所に興味あったから。それはそうと、俺は客で来てるんだから真面目にやってくれよ、夏奈子」



「・・・お、お帰りさないませ、ご主人様」

と夏奈子は俯いて言った。

「じゃないだろ？」

その言葉に夏奈子は「お帰りなさいませ、ご主人様！」と引き攣り笑いで頭を下げた。

「上出来だ。席に案内してくれ」

「こ、こちらです」

言って夏奈子は私を空席へと案内し、メニューを半ば投げる様に置いた。

「感じの悪い店員だな、お前」

「五月蠅<sup>うつつき</sup>いわね！あんまり文句言つと目ん玉割り抜いて鼻の穴に詰めるわよ！？」

「おー、こわ。客に対してそう言う事言うのか、店員は」

「お決まりになりましたらお手元のボタンを押してお呼び下さい！」  
そう言って夏奈子は私を睨みながら去って行った。

私はメニューを取り、何があるのか見てみる。

グウーと腹の虫が鳴く。

そう言えばお昼未だだったな。

私はメニューの中にオムライスを見付けると、それを頼む事にした。

ピンポン！

お手元のボタンを押す。

すると、夏奈子が慌ててやって来た。

「御注文はお決まりでしょうか？」

と引き攣り笑みで訊ねる夏奈子。

「オムライスとホットコーヒー」

夏奈子が機械にオーダーを打ち込む。

「御注文の確認を致します。オムライスがお一つとホットコーヒーがお一つ、以上で宜しいですね？」

「あとお前の裸な」

「殺すわよ!？」

「冗談だよ。注文はそれでオッケーだ」

「畏まりました。少々お待ち下さい!」

そう言つて再度、私を睨みながら去つて行く夏奈子。

それから暫くして、再び夏奈子が現れた。

手には私が注文した品を持っている。

夏奈子は態と音を立てながら皿をテーブルに置く。

「機嫌悪そうだな。何が遭つた？」

「誰の所為よ!？」

「俺だ。て言つかまたお前なのな」

「店員が少ないのよ!別にあなたの為に持つてきた訳じゃないんだからね!？」

「夏奈子、此処はメイド喫茶であつてツンデレ喫茶じゃないぞ」

「そんな事あんたに言われなくても知つてるわよ!」

夏奈子はそう言つとまたもや私を睨みながら去つて行く。

私はその夏奈子の背中に「夏奈子、スマイルな!」と叫んでやる。

「五月蠅いわね!」

と言い返す夏奈子。

やべ、怒らせたかな。後で謝つておこう。

そつ心に決めた私は、コーヒーを一口口に含んだ。

「ぶぶーーーーっ!」

私は思いつ切り吹き出した。

何だこれは!?

「ご主人様、どうかなさいましたか？」

と夏奈子がやって来て心配そうな顔で訊ねる。

「何でしょっぱいんだ、これ？」

「え、そんな筈は」

とコーヒーを一口口に含む夏奈子。

「ぶぶーーーーっ!」

夏奈子も私と同様にコーヒーを吹き出した。

「何よこれ！？しょっぱいじゃない！」

「塩入れたんだな、屹度」

「ごめん、有紀雄。直ぐに変えてくるわね」

そう言つて夏奈子は塩入コーヒーを厨房へと持つて行き、新しいのと交換して戻つてきた。

「今度はちゃんとしたやつよ」

とコーヒーをテーブルに置いて去ろうとする夏奈子。

私はその夏奈子の腕を掴んで引き留めた。

「何よ？忙しいんだから用があるんなら早くしてよね」

「お詫びに口移しな」

「……」

言葉を失う夏奈子。

「どうした、出来ないのか？」

「……」

「そうか、出来ないのか。残念だ。お前とはもう縁を切ろう」

「……よ」

「ああ？」

「やるわよ、やれば良いんでしょ？」

そう言つて夏奈子はコーヒーを口に含み、それを私の口に近付けた。

そして、コーヒーが夏奈子の口から私の口の中へと移された。端から見ればただのキスに見えるだろう。

私は移し込まれたコーヒーをゴクツと飲み込んだ。

「何してるんですか、真田さん？」

と他の店員がやつて来て夏奈子に訊ねた。

夏奈子は驚いて飛び退いた。

私は店員に向かってこう言つた。

「お詫びにコーヒーを口移しで飲まして貰つてたんだ」

「く、口移しですって！？そんな破廉恥な事は許しませんよ、お客さん……」

そう言つて店員が私を席から立たせてStaff onlyと書かれた扉の向こうへと無理矢理連れて行く。

このパターン、以前にも遭った様な・・・。

そんな事を考えていると、いつの間にか数人のメイドに囲まれて問い質されていた。

「お客さん、お名前と年齢、それから住所の方を教えてください」

「澤田 有紀雄、18歳です」

「住所は？」

「それは内緒だ」

私がそう言つと、夏奈子がやって来てこう言つた。

「市の 一丁目、五六の二です」

「何であんたが知ってるのよ？」

私を囲むメイド全員が夏奈子を見る。

「ひよつとして抜け駆け？」

その問いに夏奈子の頬が赤くなる。

「ふうん、そう言う事。あなた、契約違反ね」

「あの、どう言う事ですか？」

「この喫茶店で働く者は彼氏を作らない。それがルールなのよ。よつて、あなたはクビ」

「なっ!？」

夏奈子が驚いて固まる。

「それはそうと、お客さん。店<sup>ウチ</sup>で破廉恥な行為をした事のケジメはしっかり付けないとね」

「ケジメ？」

私が訊ねると、メイドたちはニヤリと笑みを浮かべて一斉に殴り掛かってきた。

辺りに鈍い音が木霊する。

「ぬうおっ! 夏奈子、どうなってんだこれは!？」

しかし夏奈子は依然として固まったまま。

「痛<sup>いて</sup>っ! お前ら辞めんか!？」

「そんな言葉、私たちの辞書には載ってないわ」  
どくしっ！

メイドの一人がそう言っで私の股間を蹴った。

「あうっ！」

私は激痛に股間を押さえる。

「あら、ごめんなさい。急所突いたみたいね」

その言葉に続いて今度は別のメイドが私の頬を殴る。

ガスンッ！

一体何時まで続くんだこれ？

どくしっ！

後ろからケツを蹴られた。

その衝撃で私の体は前に倒れて正面に居るメイドを押し倒した。

「きゃあっ、最低ですわ！」

残りのメイドたちが私を下敷になっているメイドから離し、強く

踏み付ける。

「ちよっ、何やってんですか！？」

我に返った夏奈子が驚いて訊ねる。

「何って、ケジメよ」

「ケジメってそれただのイジメじゃないですか！」

「五月蠅いわね。何か文句あんの？」

その時、夏奈子はキレた。

「私の、私の有紀雄に手を出すなあ！」

夏奈子がタツクルで全員を吹っ飛ばした。

「ちよっ、あんた私たちに楯突く気！？」

「突くわ。だって目の前で彼がやられてるんですもん。見捨てられ

る訳無いじゃないですか」

「そう。それじゃあ、あんたもその男みたいにして欲しいって訳？」

「否、それは一寸勘弁して欲しいわね」

「じゃあその男が私たちにボコボコに殴られるのをそこで見てなさ  
い」

「それは却下。有紀雄を虐めるなら私が相手になってあげるわ」

「おい、夏奈子」

「心配しないで、勝つから」

そう言つて夏奈子は私に笑みを向けた。

「あなた一人でこの人数に勝てるのかしら？」

メイドたちが立ち上がり、夏奈子に薄ら笑いをした。

そして次の瞬間、夏奈子の姿が視界から消えた。

辺りを見回すと、夏奈子の体が宙を舞っていた。

メイドたちは驚いて戸惑っている。

ゴンッ！

降りてきた夏奈子が一人を倒す。

そして二人、三人、四人と次々に倒していく。

「あんたで最後よ！」

そう言つて最後の一人に回し蹴りを放ち、ロッカーにぶつけてノックアウト。

「手応えないわね」

と手をパンパン払う。

「こ・・・この女・・・強い。グフッ」

メイドの一人がそう言つて気絶した。

夏奈子、お前つて一体？

「有紀雄、立てる？」

夏奈子が振り返り、私の下に来て手を差し出す。

「有り難う」

私は差し出された手を掴んで立ち上がった。

「夏奈子、お前つて何かやってんの？」

「うん。空手と柔道と合気道とボクシングとムエタイとカポエラとテコンドーと形意拳を少しだけ」

その衝撃的発言を聞いた私は顔が引き攣り後退した。

「どうしたの？」

「い、今お前が初めて怖い生き物だと思ったよ」

ガンッ！

夏奈子がロッカーに拳を当てた。

横目でチラッと見るとそこだけ思いつ切り凹んでいた。

「私って怖いかしら？」

「こ、怖くないです。夏奈子はとっても優しいです。こんなに優しい彼女は俺には勿体無いなあって思ったり」

あまりの恐ろしさに鳥肌が立った私はそう言っていた。

「て言うかさ、この有り様を見たら店長が怒るんじゃない？」

「大丈夫よ。最後に倒したのが店長だから」

「マジで？」

私は顔に大きな痣を作って倒れているメイドを眺めながらそう言った。

「大マジよ」

「そ、そうか。そんじゃあ俺、戻るな」

言って私はこの部屋を出て席に戻り、オムライスを平らげ、冷めきったコーヒーを飲み干し、お会計を済ませて自宅へ帰った。

その後、夏奈子がクビになったのは言うまでも無い。

## Story 8・夏奈子、性転換を考えるの巻

満月の日の朝、体に違和感を覚えた私は直ぐに起きて一階に降り、トイレへ入ってズボンを下げた。

スパッツを穿いている。

私は恐る恐るスパッツを下ろした。

すると何と、股間にあった筈の私の一物が消えていた。

私は他に異変が無いが、体の隅々を調べた。

先ず頭。髪が背中まで伸びている。

次に胸。

「ん」

触れてみると感じてしまった。

っ！か漏れる！

私は便座を下ろして座った。

小便が股間を伝って便器に落ちる。

小便をし終わり、私は紙で股間を拭いてスパッツ、ズボンを穿いて水を流し、トイレから出て洗面所に移動した。

洗面台の鏡を覗くと、そこには美人女性が映っている。私だ。

「よっしゃー、戻ってる！」

元の姿に戻っている事に喜びを感じた私は思わず叫んだ。

ピンポン

チャイムが鳴った。

私は玄関に移動してドアを開けた。

「おはよう、有紀嬢」

と、来客の夏奈子と言う。

「おはよう、夏奈子」

私はそう言って夏奈子の唇を奪った。

「もう、有紀嬢ったら」

夏奈子は頬を赤らめ照れてしまった。



「まあ良いじゃないか。恋人同士なんだし」

「うーん、でもやっぱり恥ずかしいわ。こんな朝っぱらから」

「大丈夫。誰も見て・・・」

その時、背後に気配を感じた私は、恐る恐る振り向いた。

その先には、顔を真っ青にした有紀雄が居た。

「一寸待ってて」

私は夏奈子にそう言うのと、ドアを閉めて有紀雄をリビングまで連れ込んだ。

「私たち元に戻ってるんだけどどう言う事？」

「し、知らねえよ。つか、女同士でキス？」

「恋人同士なんだから問題無いだろ。それとも何か？本当だったらお前が夏奈子の唇を奪う筈だったのに先に取られて悔しいってか？」

「否、そうじゃなくて、女同士でキスする事自体が問題なんだよ。

考えてでも見る。恋人と言うのは、男と女の二人組。女と女じゃ変だろ」

「じゃあお前、夏奈子に好きだって告白してこい」

「何でそうなるんすかね？」

「良いから行ってこい！」

そう言っただけで私は有紀雄のケツを蹴ってやった。  
げしっ！

「蹴るなよ！」

「五月蠅<sup>うっせ</sup>え。さっさと行け」

私は有紀雄を睨んだ。

有紀雄は「ひいっ！」と怯えながら玄関まで行き、ドアを開けて夏奈子と対面した。

「よう、夏奈子」

「あら、有紀雄じゃない。珍しいわね、あんたから話し掛けてくるなんて」

へえ、有紀雄は自分から話し掛けた事が無かったのか。

「あの、俺、夏奈子の事が好きです！付き合ってください！」

「それは何の冗談かしら？」

夏奈子は笑みを浮かべながら訊ねる。

「冗談じゃない。マジなんだ。俺、お前の事が頭から離れず、夜もずっと眠れないんだ」

「それは重傷ね。頭殴れば綺麗サッパリ忘れられるわよ」

夏奈子是有紀雄の告白を受け流し、拳を作って有紀雄の頭を殴った。

ポカッ！

「いてっ！何すんだコラ！？」

有紀雄は涙目で夏奈子を睨んだ。

「今ね、付き合ってる人が居るの。だからあんたとは付き合えない。つか、私あんたの事好きじゃないから」

「だよ」

と私は有紀雄の斜め右後ろに立って肩に手を乗せた。

「気にすんな。お前には黒田が居るじゃないか」

「え、有紀雄って新一と付き合ってたの？」

その問いに有紀雄は「付き合ってたええよ！」と両手を振りながら否定した。

するとそこへ、バッドタイミングで新一が現れた。

「か、夏奈子。来てたんだ？」

「え？」

振り向く夏奈子。

「し、新一！？あんた、何しに来たのよ！？」

「暇だから遊びに来たんだよ」

「有紀雄とデート？」

「違うからね」

「何だ、付き合っていないのか」

「どっからそんな出鱈目な情報が出て来てるの？」

「有紀雄が」

「有紀雄って？」

こいつ、私を知らんのか。

「私の恋人よ」

夏奈子がそう言って私を指差す。

すると新一が私を見て頬を赤らめた。

「新一、有紀嬢は私の物だからね」

「夏奈子、やっぱりそっちの気があるんだ。別れて正解だったよ、僕」

「（なあ、姉貴）」

と有紀嬢が小声で話し掛けてくる。

「（何だ？）」

「（黒田に告白したら？好きですって）」

「はあ!？」

訳が解らなかった私は素っ頓狂な声を上げる。

「どうかしたの？」と夏奈子。

「何でも無い」

私はそう言うと、二人を残して有紀嬢と共にリビングに移動した。

「有紀嬢、私は夏奈子が好きなの。解る？」

「黒田は好きじゃねえのかよ？」

「始めてあいつを目にした時はそうだったが、今は夏奈子だ」

「マジで言ってるのか、それ？」

「ああ、マジだ」

「.....」

有紀嬢が私を可哀想な者を見る目で見詰める。

「何だ、その顔は？」

「否、別に。姉貴が夏奈子を好きなら止めやしないけど、俺はどうなるんだ？」

「お前がどうなろうと私の知った事では無い。それにお前はもう失恋しているからな。今更どうって事も無いだろ」

私はそう言い残して玄関に戻った。

「あれ、夏奈子は？」

夏奈子が不在である事に気付いた私は、新一にそう訊ねた。

「夏奈子なら今、用事を思い出して慌てて帰ったよ」

「ふーん。で、お前は何してるんだ？」

「僕は、澤田と遊びに行こうと思って、誘いに来ただけ」

私はリビングに居る有紀雄を顧みた。

かなり落ち込んでいる。

「有紀雄は今、落ち込みムードだから駄目だと思うぞ」

「そうか。じゃあ今日の所は帰る。そう伝えといて下さい」

新一はそう言っただけを返した。

「待った」

「え？」

「お前、暇なんだろ？これから私とデートしないか？」

何を言ってるんだ私は？

「で、デートってそんな！僕があなたのような美しいお方なんて勿体ないですよ！」

その言葉に私は心惹かれた。

今まで、私を美しいと言ってくれた男など居なかったから。

「そ、そんな事言われると、惚れちゃうぞ？」

言っただけは頬を赤らめた。

超恥ずかしいわ！

「それじゃあ惚れて下さい」

「え？」

「僕、貴方を見た時、ドキッしました。だから、貴方も僕に惚れて下さい」

その言葉に、私の心臓が高鳴る。

「あの、僕、黒田 新一と言います。貴方は？」

「わ、私は澤田 有紀雄。有紀雄の双子の姉だ」

「え、澤田くんのお姉さんですか！？」

新一は驚いて目を大きく開けた。

「そんな、彼にこんな美しいお姉さんが居たなんて知らなかった」

「夏奈子とどっちが美しい？」

「夏奈子なんか比べ物にならないくらい」

「そ、それは何か、嬉しいな。よし、お礼にプレゼントだ」

私はそう言つて新一の唇を奪つた。

「ん！？」

驚き戸惑う新一。

「ぷはっ」

私は唇を離し、新一を見詰める。

「あ、あの、僕なんかとして良いんですか！？」

「良いんだ、別に」

「で、でも、夏奈子に知られたら・・・」

「大丈夫だ」

私はそう言つて再度、新一の唇を奪つた。

「有紀檸檬、何やってんのよ？」

塀の陰から姿を現した夏奈子が私を睨んできた。

「夏奈子！？お前、帰つたんじゃ？」

私は慌てて唇を離しそう訊ねた。

「帰ろうとしたんだけどさ、頭の中で戻れて声がして」

嘘だ。此奴絶対此処に居た。

「それよりあんた、今何してたのよ？」

「何って、何もしてないよ？」

「嘘。新一とキスしてた。私見てたんだからね」

「ごめん。怒ってる？」

「当然よ！あんたがそんな奴だったなんて知らなかった！さよなら！」

夏奈子はそう言つて走り去った。

「一寸待て夏奈子！」

私は慌てて夏奈子を追う。

「来ないで！あんたなんか大ッ嫌いよ！」

そう言つて夏奈子は速度を上げるが、道に落ちていた小石で足を

躓き転倒した。

私は近付いて声を掛ける。

「大丈夫か？」

「放つといて」

そう言つて立ち上がろうとする夏奈子だが、足を挫いてしまつていて立てなかった。

「ごめんな、夏奈子。もうしないから」

「信じられないわね」

「どうしたら信じてくれるんだ？」

「家まで送つて」

「任せろ」

そう言つて私は、夏奈子を背中に乗せて家まで向かった。

駅に着き、電車に乗り、隣の駅で降り、少し歩いて真田家に到着し、中に入って夏奈子の部屋を指す。

「有り難う」

部屋に入ってベッドに座らせた所で、私は夏奈子にそう言われた。

私は夏奈子に笑みを返した。

「ねえ、有紀檸檬」

「ん？」

「私の事、好き？」

「勿論、好きだ。大好きだ」

「そう。良かった。じゃあさ、キスしてよ」

その時、私の頭に有紀雄の言葉が過つた。

『女同士でキスする事自体が問題なんだよ』

「ねえ、してよ。キス」

「へっ？」

「キス」

「あ、ああ。解つた」

私はゴクリと唾を飲み込み、唇を夏奈子に近付けるが、重なる事に躊躇いが生じた。

すると夏奈子の方から、唇を重ねてきた。

驚き戸惑う私。

「ぷはっ」

唇を離す夏奈子。

「有紀檸檬、何か変」

「今の有紀檸檬、心此処にあらずって感じだよ。何か悩みでも？」

「否、そんな事無いって！」

私は両手を振りながら否定した。

「じゃ、私は帰るな」

「え、帰るの？」

「ああ。帰って有紀雄にご飯作ってやらなきゃ」

「そう。じゃあまた明日」

「ああ」

私は夏奈子の部屋を出てドアに寄り掛かった。

「はあ」

と小さな溜め息。

私、ホントに夏奈子が好きなのかな。

私は夏奈子の顔を頭に浮かべた。

するとその顔が新一の顔に変化を遂げた。

「やっぱそっちか」

私はそう呟くと、真田家を跡にし、自宅へと戻った。

家に着くと、帰宅しようとしていた新一に出会った。

「お前、居たのか？」

「あ、有紀檸檬さん。夏奈子はどうでした？」

「大丈夫だったぞ。つかお前の方はどうなんだ？」

「どうって？」

「先刻のだよ。私に惚れろって言ったる。あれ、もう少し考えてみたら？」

「うん。じゃあそうする」

そう言って新一は帰って行った。

何をしてるんだ私は。私はあいつが好きじゃないのか。  
なんて考えてても仕方ないか。

私は家に上がり、部屋に入った。  
ベッドには有紀雄が横たわっていた。

「有紀雄、人の部屋で何してる？」

「人のつて、俺の部屋だよ。姉貴のはあっち」

「あ、そつか。元に戻ったんだっけな」

私は笑いながら部屋を出て向かい側にある自分の部屋に入った。

「何だこの有り様！？」

私は部屋の散らかり様を見て驚いた。

「有紀雄、一寸来い！」

私が叫ぶと、有紀雄が面倒臭そうな顔でやって来た。

「何だ、これは？」

「何つて、散らかった部屋」

「そんなの見りゃ判る。どうしてこんなに散らかっているのだ？」

「片付け面倒だなあつて思ってたらしいの間に貯まってた」

「ほお、そつか。お前は私に喧嘩を売っているのだな？」

そう言つて私は拳をポキポキ鳴らす。

「今すぐ綺麗にしる。でなきゃ鉄拳が飛ぶぞ」

「メンドイ」

「そつか。ならお仕置きだな」

そう言つて私は拳を有紀雄の顔面に埋すめ、怯んだ隙にしゃがんで顎を蹴り上げ、宙に舞った所で連続キックを1、580発程お見舞いし、飛び上がつて踵落としを放った。

有紀雄は床に激突すると数回バウンドして仰向けに横たわった。

「あ、姉貴・・・殺す気か・・・？」

「殺しはしない、安心しろ」

「けど俺、もう死にそう」

「そつか。じゃあ死ね」

そう言つて私は助走を付けて有紀雄を蹴り飛ばした。



「うおわっ！」

有紀雄の体は通路を真っ直ぐ飛行して突き当たりの壁に激突して床に落ちた。

「死ぬわ！」

有紀雄が立ち上がり、私の下に駆けて来て睨みながら言った。

「それだけ元気ありや大丈夫だ。それより早く綺麗にしてくれ」

「自分の部屋なんだから自分でやれば良いだろ」

「お前、本当に殺すぞ？」

「・・・・・・・・」

有紀雄は怯えると、私の部屋に入って掃除を始めた。

「私は下に居るからな。しっかりやるんだぞ」

「了解です」

有紀雄は半ベソを掻きながら、元気の無い声で返事した。

私はその場を離れ、階段で一階に降りるとリビングに移動し、ソファに座ってテレビを付けた。

すると画面に病院の手術室が映り、性転換手術がどうたらかんたらとテロップが出ていた。

私はその番組を見入ってしまい、時間が経つのを忘れた。

そして気が付くと、時刻は午後三時を迎えていた。

私は立ち上がり、部屋の様子を見に行った。

「ちゃんとやって・・・！？」

私が部屋を覗くと、散らかしたまままで有紀雄が私のベッドで気持良さそうに寝ていた。

私はその有紀雄に近付き、顔面を殴って起こした。

「貴様、何をサボっているんだ！？」

「ひいっ！」

有紀雄が怯えた顔で飛び起きる。

「サボってないで片付けろ。でなきゃ東京湾に重り付けて沈めるかな」

「段々とスケールが大きくなってますね！」

「驚いてる暇があったら早く動け！」

そう言って私は有紀雄をベッドから引きずり下ろしてケツを蹴ってやった。

「いてっ！」

「片付けないと蹴り続けるからな」

「今やりまーす！」

そう言って有紀雄は掃除を再開した。

私はベッドに座って有紀雄がサボらない様に見物する。

それはそうと、性転換手術か。

受けるとなると相当な金が必要だな。

性転換手術に興味を持った私はそんな事を考え始めた。

「って、何休んでんだてめえは！？」

私は立ち上がり、手を休めていた有紀雄の頭に蹴りをくれてやった。

「いてっ！」

「やる気あんのかてめえ？」

「ありますともー」

有紀雄は涙目になりながら元気の無い声でそう言つと手を動かした。始めた。

私はもう一度ベッドに座って性転換手術について考える。

仮に私が性転換したとして、夏奈子は喜ぶだろうか？

「んー・・・」

私は唸りながら、私が性転換を受ける事を知った夏奈子の顔を浮かべる。

・・・。。。

浮かばなかった。

「有紀雄、片付けながらで良いから聴いてくれ」

「何だ？」

「性転換手術って知ってるか？」

「ああ、知ってる。って、姉貴まさか受けるの！？」

「まあ、考えてはいるが・・・」

「マジで!？」

有紀雄が手を止めて私を見る。

「姉貴、どうして急にそんな!？」

「夏奈子の為かな。まあ別にこのままでも良いんだけど、それだと将来困るからな」

「困るって何が？」

「結婚だ。私、夏奈子と結婚するつもりでいるんだ。だけど、女同士の結婚はこの国じゃ認めてない。だから」

「それ、夏奈子には相談したのか？」

「してない」

「そうか。じゃあした方が良いかもな」

「そうだな」

私は横になり、目を瞑った。

そしてそのまま眠りに入り、翌朝目を覚ました。

部屋を見ると、綺麗に片付いていた。

夏奈子ん家行くか。

私はベッドから出ると、バスタオルを持って脱衣所に移動した。服を脱ぎ、裸になって浴室に入る。

「えっ？」

中には夏奈子が居た。

「何やってんの？」

「あ、有紀嬢。おはよう」

「おはよう。つい家風呂で何してんの？」

「見て判んない？シャワー浴びてるのよ。今朝、家のお風呂壊れちゃってさ。それで、借りに来ちゃった」

「そうか、それは災難だったな。それより聴いてくれないか？」

「何？」

「私、性転換手術を受けようと思うんだ」

「はあ!？」

夏奈子は訳が解らず素っ頓狂な声を上げた。

「性転換手術だ。昨日、考えたんだけどさ、女同士の恋人ってのはやっぱ拙いよ。どっちかが男にならなきゃ。そうだろ？」

「駄目」

「え？」

「手術なんか受けちゃ駄目」

「何でだよ？」

「だって、有紀樺が男なんかになったら、私が有紀樺の子ども産まなきゃいけないもん。だからお願い。考え直して」

「そ、それはつまり、お前も考えてるって事か？」

「まあ、一応」

「んー・・・」

私は唸りながら、夏奈子に産ませるシーンと私が産むシーンを思い浮かべた。

「産みたいかも」

「じゃあ、私が受けるよ。その手術」

「良いのか？」

「うん。私ね、本当は男に生まれたかったんだ。だから、思い切って受ける」

夏奈子はそう言つと「じゃあ」と残して浴室を出て行つた。

夏奈子が男ねえ。となると私は男になつた夏奈子にあんな事やこんな事をされるって訳か。何か凄く楽しみだ。

私はそんな事を考えながら、シャワーを浴び、頭と体を洗い、浴室を出てバスタオルで体を拭き、自室へと向かつた。

その途中、階段の前のトイレから有紀雄が出て来て私の裸を見て鼻血を出した。

「あ、姉貴。裸体で家ん中彷徨く<sup>うろつく</sup>のやめてくれ」

「別に良いだろ。今、男はお前しか居ないんだからな」

「そつ言つ問題じゃねえよ」

「じゃあどつ言つ問題なんだ？」

「裸で彷徨かれると襲いたくなるんだ」

「そうか。じゃあ襲えば良いじゃないか。好きなだけ襲われてやるぞ」

「マジで！？ヤッホーイ！」

有紀雄がそう叫んで押し倒そうとしてきた。

「ふんっ」

私は素早く避けて顎を蹴り上げ、宙に舞った有紀雄の体に2、500発の蹴りをお見舞いし、飛び上がって止めの踵落としを放った。有紀雄は床に叩き付けられ、数回バウンドしてうつ伏せに状態になった。

「どうした。もう襲わないのか？」

「畜生！こうなったら意地でもセックスしてやる！」

そう言つて有紀雄が起き上がった。

私はその有紀雄の顔面に躊躇う事なく拳を埋めずめる。

「おぶっ！」

有紀雄は変な声を出して吹っ飛び、玄関のドアにぶつかった。

「この野郎！」

有紀雄が起き上がって駆けてきた。

私は上にジャンプして避けた。

「うおっ！」

有紀雄は転んで床を滑って行き、壁にぶつかって止まった。

「避けんなよ！」

「避けなきゃお前に押し倒されてGAME OVERだ」

「俺はゲームのボスか？」

「否、雑魚モンスターだ。ドラエで言うത്スイム辺りか」

「一撃で死ぬわ！」

「何を言う。メタルスイムは頑丈だぞ？」

「そっちなのかよ……。つーか、早く着替えろ」

「ああ、わかっ……。へくちっ！」

私は可愛い噓くしゃみをしてしまった。

「バーカ。だから全裸で彷徨くなって言っただんだ」

「面目無い」

私はそう言うバスタオルを巻いてさっさと部屋に行き、服を着て有紀雄の下に戻った。

「へ・・・へくちっ！」

再び可愛らしい噓を放った。

「風邪だ。寝てろ」

「風邪如きに敗ける私では」

その時、倦怠感が私を襲い、その場に倒れてしまった。

「有紀雄、スマンがベッドまで運んでくれ」

「嫌だ」

「殴るぞ？」

「そんな状態で出来るのか？」

私は匍匐ほふくで有紀雄に近付き、背中に乗って頭を思いつ切り叩いた。

「いてっ！」

「殴られたくなかったらベッドまで運べ」

「イエッサー」

有紀雄はそう返事をして私を背負い、部屋まで行くと私をベッドに寝かせた。

「有紀雄、部屋はお前が？」

「否、夏奈子だ」

「そうか。じゃあお仕置きだな」

私はそう言つて有紀雄の腕を掴んで体を寄せ、上下反転して乗し掛かって顔を痣が出来るまで殴った。

「姉貴、暴力はやめろよ」

「暴力じゃない。お仕置きだ」

「虐待だぞ？」

「虐待じゃねえ！」

ガスッ！

私は思いつ切り殴った。

「すびばぜん」

有紀雄はそう言つて気絶した。

私は有紀雄の体をベッドから落とした。

しきし気絶している為か、反応は無かった。

「つまんね」

私はそう呟くと、布団を被つて眠った。

つづく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5412d/>

---

バイセクシュアル

2010年10月28日06時39分発行